

金曜夜の夕飯決闘

逸環

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デュエルモンスターズ。

世界に広まったこのカードゲームは、誰でも手軽に楽しめる娯楽だ。

だが、誰でも楽しめる娯楽というのは、得てして賭け事の対象にもなりやすい。

そう、例えば――

「俺が勝ったら、今日の夕飯はカレーな！」

「僕が勝ったら、ハンバーグだからね！」

――その日の夕飯の献立を賭ける事もある。

これは金曜日の夕飯の献立を巡る、(料理が)熱い戦い。

目次

| | |
|-------------|----|
| 甘口サツマイモカレー | 1 |
| カキグラタン | 15 |
| キャンプカルボナーラ | 38 |
| 空き缶ポップコーン | 64 |
| 鮭とキノコのホイル焼き | 78 |

甘口サツマイモカレー

デュエルモンスタース。

世界に広まったこのカードゲームは、誰でも手軽に楽しめる娯楽だ。

だが、誰でも楽しめる娯楽というのは、得てして賭け事の対象にもなりやすい。

そう、例えば――

「俺が勝ったら、今日の夕飯はカレーな！」

「僕が勝ったら、ハンバーグだからね！」

――その日の夕飯の献立を賭ける事もある。

金曜日の夜。

それは多くの勤め人たちが土日の休みを前に、心を躍らせる日。

翌日が休みであり、仕事を気にせず遊べるこの日は、今は遠きバブル期には花の金曜日。略して「花金」と呼ばれていた。

バブルが弾けて久しい昨今では使われなくなりつつあるこの言葉だが、それでもこの休日前の夜を楽しもうとする人は多い。

今からデュエルをしようとする2人も、もちろんその口だ。

スーツ姿の男は『東雲 しののめ 圭史 けいし』。Tシャツにジーンズの女は『押切 おしぎり 冴香 さえか』。

デュエルディスクでデュエルするのも良いが、それでは場所を取ってしまうので駅前の立地ではデュエルをするためのスペースの確保が難しい。

そこで、カードショップのフリースペースだ。

ここでなら、テーブルに備わった機能により、小さいながらもソリッドヴィジョンでのデュエルを楽しめる。モンスターたちが小さくなるのに合わせ、ダイレクトアタックを受けるのもソリッドヴィジョンで投影されるデュエリストたちのアバター（課金要素あり）というのも良い。

それぞれ会社を気合で定時上がりし、駅前のカードショップのリリースペースで合流。本日の夕飯の献立を賭け、デュエルを行うのだ。

東雲 圭史

LP：8000

手札：5枚

フィールド：なし

押切 冴香

LP：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「俺の先行！まずは《マンジュ・ゴッド》を通常召喚！効果でデッキから儀式魔法の《高等儀式術》を手札に加える！」

「儀式召喚かー！」

マンジュ・ゴッド

レベル4 光属性 天使族

攻撃力：1400

開幕に現れたのは、万の腕を持つ仏像を思わせる天使。

とはいえ現在はミニサイズにデフォルメされた、可愛らしいものだ。

その手が東雲のデッキへと差し伸べられると、カードが手札へと加わる。

「今手札に入れた《高等儀式術》を発動！デッキから《異次元トレイナー》と《プロトロン》を3体ずつリリースし、儀式召喚！！唸れ！《ライカン・スロープ》！！」

「アオオオオンツツ！！」

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400

1匹の人狼が、フィールドの中央に降り立ち吼える。

本来ならさぞ恐ろしい姿だろうが、ミニサイズの今ではそれすらキュート。

「《ライカン・スロープ》!?……って、どんなカードだっけ？効果見せてくれる？」

「ほらよ」

「えーと……? 『相手ライフに戦闘でダメージを与えた時、自分の墓地の通常モンスターの数×200ポイントダメージを相手に与える』……? 今墓地には……」

「《高等儀式術》で落とされたのが6体だな」

「6×200＝1200か。バスターダメージとしては大きいけど、そこまで脅威でもないかな?」

「まあ、そんなもんだな。実際コスパは悪いし。とりあえず、俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドするぜ」

東雲 圭史

LP：8000

手札：2枚

フィールド：マンジュ・ゴツド、ライカン・スロープ、伏せ1枚

押切 冴香

LP：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「僕のターン、ドロー。ふふーん、このターンで勝っちゃうかもね」

「お、随分と良い手札みたいだな?」

「いくよ！まずは《ユニゾンビ》を召喚！一つ目の効果で、手札の《馬頭鬼》を墓地に送って、レベルを1つ上げる！」

片足がないゾンビ2人が、肩を組み支え合いながら現れる。

彼らがハモリながら歌い始めると、押切の手札からカードが墓地へと送られる。

そして歌はまだ終わらない。

「お、アンデットか」

「そうだね。《ユニゾンビ》のもう一つの効果で、デツキから《ワイトベイキング》を墓地に送って、更にレベルを1つ上げるよ!」

ユニゾンビ

レベル3↓4↓5 闇属性 アンデット族

攻撃力：1300

「[ワイト] か!しかもそれ最近出たばかりの奴だろ!」

「そうだね。《ワイトベイキング》が墓地へ送られた時の効果を発動するよ。デツキから《ワイトベイキング》以外のワイトモンスター2体を手札に加えて、その後手札を1枚捨てる。《ワイトプリンス》と《ワイトメア》を手札に加えて、今引いた《ワイトプリンス》を墓地へ送るよ。そして墓地へ送られた《ワイトプリンス》の効果を発動するね。デツキから《ワイト》と《ワイト夫人》を1枚ずつ墓地へ送るよ」

「みるみる内に、墓地にカードが溜まっていく……」

「まだ終わらないからね?墓地の《ワイトプリンス》の効果を発動!墓地の《ワイトプリンス》と《ワイト》2体を除外することで、《ワイトキング》をデツキから特殊召喚するよ。《ワイト》と墓地では《ワイト》として扱う《ワイト夫人》をゲームから除外して、デツキから《ワイトキング》を特殊召喚!」

「カカカツ!」

ワイトキング

レベル1 闇属性 アンデット族

攻撃力：0

3体のモンスターが墓地から消えると、デツキからカシャリ、カシャリと硬い物が擦れ合い動く音と、生ける者を嘲笑うかの様な声が聞こえる。

その声と共に這い出るそれは、ボロを纏いし骨の王。

彼の力は、墓場より満たされる。

と、仰々しく表現したところで、ソリッドヴィジョンの関係でミニチュアサイズなので、恐れも何もあったものではないのだが。

「《ワイトキング》は、墓地の《ワイト》の数だけ攻撃力を1000ポ

イントアップするよ」

「《ワイト》モンスターたちは、共通して墓地で《ワイト》になったはずだから、《ワイトベイキング》も今は《ワイト》か？」

「そうだね。だから墓地には今《ワイト》が1体だから、攻撃力1000アップだね」

ワイトキング

レベル1 闇属性 アンデット族

攻撃力：0↓1000

「墓地やら除外やら色々なってるけど、これ実質《ユニゾンビ》一枚か
らかよ……」

「そうだね。でも終わらないよ。さっき手札に加えた《ワイトメア》の効果を発動するね。このカードを手札から墓地へ送って、除外されている《ワイト夫人》を守備表示で特殊召喚するよ。もちろん、《ワイトメア》も墓地で《ワイト》になるから、《ワイトキング》はパワーアップ！」

ワイト夫人

レベル3 闇属性 アンデット族

守備力：2200

ワイトキング

レベル1 闇属性 アンデット族

攻撃力：0↓2000

「おっと、この流れはちょっと嫌な予感しかしないぞ？」

「正解！手札から《ワイトプリンセス》を墓地へ送り、フィールドのモンスターはレベルかランク×300ポイント、攻撃力と守備力を下げ
るよー！」

「お前!? しかもどうせそれも墓地で《ワイト》になるんだろ!？」

「うん！」

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400↓600

マンジュ・ゴッド

レベル4 光属性 天使族

攻撃力：1400↓200

ユニゾンビ

レベル5 闇属性 アンデット族

攻撃力：1300↓0

ワイト夫人

レベル3 闇属性 アンデット族

守備力：1300

ワイトキング

レベル1 闇属性 アンデット族

攻撃力：2000↓1700↓2700

僅かな弱体化に留まるワイトたちに対し、東雲のフィールドへの影響は大きかった。

先程高らかに吼えて現れた人狼も、今では弱々しく耳もへたれてしよげてしまっている。なにせその力が4分の1にまで下げられたのだから、当然だろう。

「あー、いっけなーい。《ユニゾンビ》の攻撃力が0になっちゃったー」
「……………ここまで白々しい発言も中々ねえな、おい」

「うん、じゃあ《ユニゾンビ》と《ワイト夫人》でリンク召喚するね。アンデット族モンスター2体でリンク召喚！来て！《アドヴェンデット・セイヴァー》!!」

アドヴェンデット・セイヴァー

リンク2 闇属性 アンデット族

攻撃力：1600

ビルの上からフィールドに降り立つ、ダークヒーロー然としたモンスター。

骨の王の前に立つその姿は、さながら死者の王を守る騎士の様。

「あ、《ワイト夫人》が墓地に行ったことで、《ワイトキング》の攻撃力は追加で上昇するね」

ワイトキング

レベル1 闇属性 アンデット族

攻撃力：2700↓3700

「『ヴェンデット』ってアンデットの儀式カテゴリーだろ？俺実際には初めて見るんだけど、効果見せてくれるか？」

「うん、どうぞー」

「ありがたいな。何々……？ほう、モンスターゾーンにいる限り、『リヴェンデット・スレイヤー』として扱う？ああ、そういえばそういう儀式モンスターがいたな。他には……なあ、2つ目はともかく、3つ目の効果が狙いだろ？」

「やっぱり分かっちゃう？」

「当たり前だろーよ!?ダメージ計算時にデッキからアンデット族1体を墓地に落として、そのレベル×200分相手の攻撃力をダウンさせるって、どう考えても『ワイト』シリーズ落とす気満々じゃねーか!!」

「ちなみに、『ワイトプリンス』の効果にターン1回の制限はないよ」

「それだけで『ワイトキング』の攻撃力は3000アップかよー！」

「そうだね。それじゃあ、バトルしようか！」

その宣言の直後。

《ライカン・スロープ》が、その魔狼の咆哮を轟かせた。

「何を……ッ!?こ、これは!?僕のモンスターたちが怯えて、攻撃しようとしんない!?!」

「……リバーズカードオープン、『威嚇する咆哮』!このターン、お前は攻撃宣言できない!」

「クッ!?なら、僕はこのままターンエンドだ!」

「手札3枚もあって、伏せなしか……。やっぱりいつもの火力に偏重したデッキなんだな」

「別に良いだろう!?!」

東雲 圭史

LP：8000

手札：2枚

フィールド：マンジュ・ゴッド、ライカン・スロープ

押切 冴香

LP：8000

手札：3枚

フィールド：ホワイトキング、アドヴェンデット・セイヴァー

「よし、俺のターンだな。ドロ―……ふむ、なるほどな」

引いたカードを確認し、東雲の口の端が弧を描く。

「おや、良いカードが引けたのかな？」

「ああ、中々悪くない。まずは《儀式の準備》を発動！デッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加え、その後墓地から儀式魔法を手札に加える！」

「2体目の《ライカン・スロープ》かな？でも、僕の《ホワイトキング》には勝てないだろう？」

「デッキからレベル1の儀式モンスター！」

「……レベル1の儀式モンスター？……ツ!？」

「《サクリファイス》を手札に加え、墓地から《高等儀式術》を手札に加える！そのまま《高等儀式術》を発動！デッキからレベル1の通常モンスターである、《バニーラ》を生贄に捧げ、現れる！《サクリファイス》!!」

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

可愛い兎が生贄に捧げられ、単眼の悪魔……否、一応は魔法使いの魔物が顕現する。

どう見ても悪魔族だが、種族欄には魔法使い族と書かれているので、魔法使いなのだ。

文句は《ハングリーバーガー》に言うが良い。

「《サクリファイス》……！その効果は……ツ！」

「知っての通りだ！お前のモンスター1体をこのカードに装備させ、ステータスをその攻撃力と守備力と同値にする！《ホワイトキング》を吸収しろ！」

《サクリファイス》が《ホワイトキング》を掴むと、そのまま自身の体の

中に沈めていく。

徐々に骨の体は消えていき、残されたのは《サクリファイス》の体から見える頭蓋骨のみ。

本来ならばこれで《サクリファイス》の力が強化されるのだが……。
「《ワイトキング》の蘇生効果は、戦闘破壊にしか対応していない……。でも、攻撃力も守備力も元々は0！《サクリファイス》は強化されない！」

「目的はあくまで《ワイトキング》の処理だから問題ない。続いて、弱体化した《ライカン・スロープ》と《マンジュ・ゴッド》でリンク召喚だ！召喚条件は名前の異なるモンスター2体！リンク召喚！現れる、《クロシープ》！」

クロシープ

リンク2 地属性 獣族

攻撃力：700

「《クロシープ》……？確か儀式召喚にも対応した効果をもっていたはずだけど、何でこのタイミングで？」

「インスタントフュージョン「こういうことだよ！《簡易融合》を発動するぞ！」

「融合召喚の方か！」

「正解だ！ライフポイントを10000支払い、エクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する！現れる！《サウザンド・アイズ・サクリファイス》！《クロシープ》の右下のリンクマーカーの先に特殊召喚する！」

フィールドにカップ麺が現れると、東雲のライフポイントがお湯として注がれる。

そしてカップ麺の蓋が内側から開くと、先程の《サクリファイス》によく似た、しかし今度は単眼ではなく千の瞳を持つ魔法使いが現れる。

東雲 圭史

ライフポイント：8000↓7000

サウザンド・アイズ・サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

「そしてこれにより、《クロシープ》の効果も発動される！融合モンスターがこのカードのリンク先に特殊召喚された時、墓地からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する！」

「《マンジュ・ゴッド》を特殊召喚して、効果を使う気かな？」

「いや、《マンジュ・ゴッド》は特殊召喚だと効果は使えない。代わりに《バニーラ》を特殊召喚するぞ！」

バニーラ

レベル1 地属性 獣族

守備力：2050

「そのまま《サウザンド・アイズ・サクリファイス》の効果も発動して、お前の《アドヴェンデット・セイヴァー》を奪う！」

「そんな!？」

抵抗を試みる《アドヴェンデット・セイヴァー》だが、その様な抵抗は無意味に《サウザンド・アイズ・サクリファイス》へ吸収されてしまう。

そしてその力は、《ワイトキング》とは違い《サウザンド・アイズ・サクリファイス》を強化してしまった。

サウザンド・アイズ・サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0↓1600

「そして《クロシープ》と《バニーラ》でリンク召喚！召喚条件は、リンクモンスターを含むモンスター2体以上！現れる、《天威の鬼神》！」

闇に堕ちた武術家が、拳を打ち鳴らして押切のアバターを威嚇する。

天威の鬼神

リンク3 闇属性 幻竜族

攻撃力：3000

「続けて、《サクリファイス》と《サウザンド・アイズ・サクリファイス》でリンク召喚！召喚条件は、闇属性モンスター2体！現れる、《見

力を彼に与える。

「《ライカン・スロープ》のバーン効果を合わせると……ッ！」

「お前のライフポイントは0になる！やれ！《見習い魔嬢》、《天威の鬼神》！そして止めだ！《ライカン・スロープ》でダイレクトアタック！！『シャドウ・ダンス』！！」

「うわあああっつ!!?」

怒涛の攻撃がアバターに殺到し、押切のライフポイントを削り切る。

そのトドメを飾ったのは、《ライカン・スロープ》のバイティングだった。

押切 冴香

ライフポイント：8000→0

「……マジで手札3枚あって、防御札一つもなかったのか」

「うん、残りは《大欲な壺》と2枚目の《ユニゾンビ》に……《ワイト》だよ」

「なるほどなあ……そりゃ防げないな」

「理論上、最大で20000の攻撃力の《ワイトキング》を出して殴れば勝てるからね。防ぐ必要がある前に勝つつもりだったんだ。……というか、そっちこそ採用カードに《威嚇する咆哮》って今時中々見ないよ……?」

「悩んだんだけどな。デッキのメインが《ライカン・スロープ》だから、やや低めの攻撃力だから戦闘破壊を防ぐためと、雰囲気合わせで入れたんだ」

「ああ、あの《ライカン・スロープ》が吼える事で発動されるのは、ソリッドヴィジョンも小粋だったね」

「だな。あれを見ただけで、入れた価値があつたつてもんだ。……さて、これで今日はカレー決定だな!!」

「ッ!!?そ、そうだった！僕のハンバーグがあああ!!」

テーブルに突っ伏して嘆く押切を、額に手を当てて呆れながらも、

東雲は思う。

仕方がないから、冷凍のハンバーグも付けてハンバーグカレーにしてやろう……と。

「そら、買い物して行くぞ。どうせ今日もウチに泊まるんだろ？」

「そうだね！今日は飲むよ！負けたから沢山飲むよ！」

「お前は勝つても負けても飲んでるだろうが……」

そして二人はカードショップを後にする。

目指す先は、23時まで開いている駅前の大型スーパー食品売り場。

なお、その食品売り場でモンスターオブイギョアがおまけで付く食玩を買いたいと、駄々を捏ねる押切に東雲はもう一度呆れる事になるのは、また別の話。

「さて、と」

エプロンの紐を締め、台所に立つ。

今日はカレーだが、少し違ったカレーを作る予定だ。

既に時間は夜の7時半。手早く進めよう。

メインの食材は、サツマイモ。

《ワイトベイキング》の焼き芋を楽しんでいた絵を見て思い付いたが、甘口のカレールーと合わせて使う。

まずは先に、ご飯を炊き忘れない内に炊いておく。

玉ねぎを切って塩で軽く揉み、電子レンジに入れる。これで余分な水分が抜け、早く炒める事ができる。

豚肉を炒める際に、ビールを少しだけ注いで風味付けをする事で、甘口カレーながらも大人の隠し味に。

ちなみに、このビールは料理を手伝いもしないで、テレビでプロデュエリストの試合を観戦している押切から奪って来たものだ。

残ったビールは東雲が自分でそのまま飲み干し、中を濯いで乾かしておく。

豚肉と玉ねぎを炒めたら、そこに水を投入。カレーの定番ニンジンは、今日は甘味の強いサツマイモがあるためパスをする。

アクを取りつつある程度煮えたところで、カレールーと煮崩れしやすいサツマイモを最後に入れて、柔らかくなるまで再度煮る。

圧力鍋があれば早そうだが、生憎と東雲の家にはないため使えない。

後は電子レンジで冷凍ハンバーグを温めれば、完成だ。

「ほら、できたぞ」

「おー、良い匂い……あれ!?ハンバーグ乗ってるよ!?!」

「カレーハンバーグも、カレーには違いないからな」

「流石圭史くん!分かってるね!」

「はいはい。それじゃあ、食うか」

「そうしよう」

今日の夕飯は、甘口サツマイモカレー。

「いただきます」

金曜日の夜の、特別な夕食。

カキグラタン

今日も今日とて、一日が終わる。

仕事が終われば、人々は家路を急ぐ者がいれば、飲み屋を梯子する者、趣味の店へと駆けていく者。様々に生活をしていく。

だが、今日は少し特別な一日の終わり。

明日は土曜日、休みの日。

心置きなく楽しみを楽しめる、金曜日の夜。

そんな素敵な夜に、あの二人はまたカードショップに集まっていた。

「今日こそは僕のリクエストのグラタンにしてもらおうからね！」

「作るのはどっちにしる俺だろうが！俺が勝ったらカルボナーラにするからな！」

そう、金曜日の夕飯の献立を賭けて。

「デュエル!!」

押切 冴香

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「今回は僕が先行だね。まずは《スピードロイドS Rバンブー・ホース》を通常召喚！」

スピードロイド

S Rバンブー・ホース

レベル4 風属性 機械族

攻撃力：1100

スピードロイド

「[S R]か！」

「《S R バンブー・ホース》の召喚時の効果を発動するよ。手札からレベル4以下のスピードロイドモンスターを1体特殊召喚する！おいで！《S R 三つ目のダイス》！」

開幕として現れた機械仕掛けの馬が嘶くと、その呼び声に応じて4面ダイスを模した機械が現れる。

テーブル上のソリッドヴィジョンに合わせたミニチュアサイズが、それぞれをキュートな仕上がりにしている。

S R 三つ目のダイス

レベル3 風属性 機械族

攻撃力：300

「《S R》でレベル7シンクロが可能になったという事は……あいつを出すつもりか！」

「いくよ！レベル4の《S R バンブー・ホース》に、レベル3の

《S R 三つ目のダイス》をチューニング！シンクロ召喚！来て！《クリアウイング・ファスト・ドラゴン》！！」

「ガアアアアアアアアアアツツ！！」

「ちよつと違った!!そつちか!そつちか!!」

《S R バンブー・ホース》と《S R 三つ目のダイス》が作る、光り輝く道を風が通り抜けると、白地に緑の装甲を纏うドラゴンが咆哮を轟かせて現れる。

その瞳が東雲のアバターを見据え、戦う意欲を見せている。

クリアウイング・ファスト・ドラゴン

レベル7 風属性 ドラゴン族

攻撃力：2500

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》もちろんありだけど、圭史くん相手ならこつちかなって」

「こいつ……俺の傾向から読んで来てやがる……」

「グラタンのためならば……だよ！続けてカードを2枚セットして、ターンエンドするよ」

押切 冴香

ライフポイント：8000

手札：1枚

フィールド：クリアウイング・ファスト・ドラゴン、伏せカード2枚

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「それじゃ、俺のターンだな。ドローしてっと。うーむ……ここはまずは、永続魔法《ウォーターハザード》を発動するぜ。俺のフィールドにモンスターがない場合、手札からレベル4以下の水属性モンスターを特殊召喚できるようになる。俺はこの効果で、《フィッシュボーグーアーチャー》を守備表示で特殊召喚する」

《ウォーターハザード》で生じた海から、2つの水槽の中にカワウソとアシカを入れた機械のケンタウロスが現れる。

一応は魚族だし、名前にフィッシュと入ってはいるのだが、魚要素はどこにもないのは目を瞑って欲しい。

フィッシュボーグーアーチャー

レベル3 水属性 魚族

守備力：300

「で、速攻魔法《帝王の烈旋》を発動する」

「そのカードは!?!」

「お前も知つての通り、このターン俺がアドバンス召喚をする際に、お前のモンスターを1体使う事が出来る様になる」

「《クリアウイング・ファスト・ドラゴン》がP^{ペンデュラム}ゾーンに行く効果は、

破壊された時だけ……リリースには対応していない……!」

「というわけで、俺の《フィッシュボーグーアーチャー》とお前の《クリアウイング・ファスト・ドラゴン》をリリースして、アドバンス召喚! 《ビッグ・ホエール》!!」

「オオオオオオ……!!」

《クリアウイング・ファスト・ドラゴン》のものではない烈風が彼を覆うと、その身を無理矢理に掻き消してしまう。《フィッシュボーグ・アーチャー》と共にその姿は消え、後に新たに出現したのは、海を割る大クジラ。

ビッグ・ホエール

レベル9 水属性 魚族

攻撃力：1000

「……あれ？最上級、それもレベル9のモンスターにしては、随分と控えめな攻撃力だね？つていうか、鯨なのに魚族なんだ……」

「《要塞クジラ》からの伝統だな。まあ、攻撃力が低い分、効果は中々だぞ。《ビッグ・ホエール》がアドバンス召喚に成功した時、こいつをリリースしてデッキからレベル3以下の水属性モンスター3体を、効果を無効にして特殊召喚できる！」

「3体も!？」

「《貪食魚グリーデイス》と、《オイスターマイスター》を2体特殊召喚するぞ！」

《ビッグ・ホエール》が噴火の様な潮を吹くと、そこから現れる鰐の様な口をした魚と、牡蠣の戦士が2体。

彼らを呼び出した後、《ビッグ・ホエール》は出て来た時とは逆に海の底へと消えていく。

貪食魚グリーデイス

レベル3 水属性 魚族

攻撃力：1000

オイスターマイスター

レベル3 水属性 魚族

攻撃力：1600

「総攻撃力は4200か……。よし、このままバトルフェイズに入ろう。まずは《貪食魚グリーデイス》で攻撃だ！」

「リバーズカードオープン！《メタル・リフレクト・スライム》！」

「はあ!?!」^{スビークロイナ}「S R」^{スビークロイナ}「なのにか!?!」

「ふふふ！この効果で、この罨カードは守備力3000のモンスター

守備力：0

「続いて《貪食魚グリーティス》がシンクロ召喚の素材となった時の効果で、こいつが素材となった《飢鱔竜アーケティス》の攻撃力と守備力を、お前の手札の数×200アップする。まあ、1枚しかないから200だけアップだな」

飢鱔竜アーケティス

レベル9 水属性 魚族

攻撃力：2000↓2200

「最後に《飢鱔竜アーケティス》のシンクロ召喚成功時に効果を発動する！素材にしたチューナー以外のモンスターの数だけ、ドロウする！俺は2枚ドロウ！これにより《飢鱔竜アーケティス》の攻撃力と守備力は、更に1000アップする！」

飢鱔竜アーケティス

レベル9 水属性 魚族

攻撃力：2200↓3200

「これで手札は4枚！まだまだ行くぞ！フィールドの《オイスターマイスター》2体でリンク召喚！召喚条件は水属性モンスター2体！リンク召喚！現れるろ！《マスター・ボーイ》！」

マスター・ボーイ

リンク2 水属性 水族

攻撃力：1400

「水属性強化のリンクモンスターだっけ？」

「合ってるぞ。こいつがいる限り、フィールドの水属性モンスターは攻撃力と守備力を500アップさせる」

「あ、フィールド全体なんだ？じゃあ、僕の《メタル・リフレクト・スライム》も強化されるんだね」

「そうそう」

髭を生やしたヒトデの紳士が現れると、その紳士ジェントリオーラ的な雰囲気でフィールドの水属性たちを強化する。

ジェントリオーラとは何なのか。その答えはイギリスにたぶんある。

マスター・ボーイ
リンク2 水属性 水族
攻撃力：1400↓1900
飢鱔竜アーケティス
レベル9 水属性 魚族
攻撃力：3200↓3700
メタル・リフレクト・スライム
レベル10 水属性 水族
守備力：3000↓3500

「そして魔法カード《リハイアサン海竜神の激昂》を発動するぞ。デッキから《激流葬》を手札に加える」

「あ!? 《激流葬》!?!」

「カードを2枚伏せるが、これで《飢鱔竜アーケティス》の攻撃力は下がるぞ。良かったな」

「今絶対、それ以上に悪いもの仕込まれたんだけど何が良いのかな!?!」

飢鱔竜アーケティス

レベル9 水属性 魚族

攻撃力：3700↓2700

「これ以上は動けないな。ターンエンドだ」

押切 冴香

ライフポイント：8000

手札：1枚

フィールド：メタル・リフレクト・スライム、伏せカード1枚

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：2枚

フィールド：飢鱔竜アーケティス、マスター・ボーイ、ウォーター・

ハザード、伏せカード2枚

「僕のターン、ドロワー……うーん。どう考えてもあの2枚の内片

方は、《激流葬》なんだよなあ……」

「さあ、どうだろうな」

「よし、決めた！《トレード・イン》を発動するよ！レベル8のモンスターを手札から捨てて、2枚ドロウする！」

「……は!? 《トレード・イン!?》【S R】には、レベル8のモンスターなんていないはずじゃ……!?」

「レベル8のモンスター、《神獣王バルバロス》を手札から捨てて2枚ドロウ！」

「バルバロ……そうか！《獣神機王バルバロスU^{ウル}r》のための機械族か！」

「そう！メインはS Rたちじゃなかったんだよ！……ここで今引いた《レスキューラビット》を召喚！」

レスキューラビット

レベル4 地属性 獣族

攻撃力：300

「……通そう！」

「《レスキューラビット》の効果を発動！この子をゲームから除外して、デッキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚する！来て！《忍犬ワンダードッグ》たち！」

ヘルメットとゴーグルを身に付けたウサギが、首からかけたホイッスルを吹くと、ドロンつと煙と共に現れる2体の忍者……否、忍犬。

そして《レスキューラビット》は《忍犬ワンダードッグ》たちが現れた時の煙に紛れて、気が付けば退場している。

忍犬ワンダードッグ

レベル4 風属性 獣戦士族

攻撃力：1800

「……まだ通す！」

「なら、レベルの合計が8以上になるように自分のモンスターをリリースする事で、このモンスターは特殊召喚できる！レベル4の《忍犬ワンダードッグ》2体をリリースして、現れよ！《獣神王バルバロス》！」

「ガオオオオオツツ!!」

「そつちも入れてるのか!」

《忍犬ワンダードッグ》たちが地面に煙玉を叩き付けて消えると、入れ替わりにドリルの様な螺旋のランスを持つ、ケンタウロスのライオン版とも言える様な獣の戦士が勇壮にフィールドへ降り立つ。

獣神王バルバロス

レベル8 地属性 獣戦士族

攻撃力：3000

「なら、その特殊召喚に合わせてリバーズカード発動!《激流葬》だ!フィールドのモンスターたちを全て破壊!」

「やっぱりね!」

《獣神王バルバロス》がフィールドに足を付けた途端に、東雲のフィールドから轟々たる激流が押し寄せて全てを押し流していく。

その水の勢いの前には陸の生き物である《獣神王バルバロス》だけでなく、水の生き物である《マスター・ボーイ》や《飢鱔竜アーケティス》すらも例外なく押し流される。

そのはずだった。

「そして俺の水属性モンスターが破壊された事をトリガーに、もう一枚のリバーズカードを発動する!《激流蘇生》!破壊された水属性モンスターたちを蘇生させ、その数×500ポイントのダメージをお前に与える!」

「(ジャアアアアアアアツツ!!)」

《マスター・ボーイ》と《飢鱔竜アーケティス》が流された先は、絶望の海底墓地ではなく輝く海面フィールド。

どうやら、水の流れが途中から変わり、彼らに好都合となったらしい。

だが、水属性モンスターたちにとって都合の良い水流は、逆に対戦相手である押切には不都合であり、水飛沫がアバターを襲ってダメージを与える。

「蘇生されるのは《マスター・ボーイ》と《飢鱔竜アーケティス》の2体だから、合計で1000ポイントのダメージだね?」

「ああ。それにチェーンして、《マスター・ボーイ》が戦闘や効果で破壊された場合の効果も発動しよう。墓地から水属性モンスターを手札に戻す。ここはそうだな……《オイスターマイスター》にしておうか」

「じゃあ、逆順処理としてまず、《オイスターマイスター》が圭史くんの手札に。それから《マスター・ボーイ》と《飢餓竜アーケティス》が蘇生されて、僕が1000ポイントのダメージだね」

「ついでに俺の手札が3枚に増えるから、《飢餓竜アーケティス》の攻撃力が1500アップしてるな。ん？いや、《マスター・ボーイ》込みで2000アップか」

飢餓竜アーケティス

レベル9 水属性 魚族

攻撃力：1000↓3000

マスター・ボーイ

リンク2 水属性 水族

攻撃力：1400↓1900

押切 冴香

ライフポイント：8000↓7000

「僕のフィールドはやられたけど、これで終わらないよ！墓地の《S R バンブー・ホース》の効果が発動！このカードを墓地から除外して、デッキから風属性モンスター1体を手札に加える！《S R ベイゴマックス》を手札に！」

「そのカード、そんな効果もあつたのか!?!」

「そうだね。《S R ベイゴマックス》の効果が発動！自分フィールドにモンスターが存在しない時、手札から特殊召喚する！」

墓地から聞こえた馬の嘶きに応じ、赤いベーゴマがいくつも連なり現れる。

S R ベイゴマックス

レベル3 風属性 機械族

攻撃力：1200

「《S R ベイゴマックス》が特殊召喚された時、効果が発動される！」

デッキから《S R ベイゴマックス》スピードロイド以外のスピードロイドモンスターを手札に加える！僕は《S R タケトンボーグ》スピードロイドを手札に加える！ここでリバースカードを発動！永続トラップ《リビングデッドの呼び声》！」

「あ!? 《激流葬》のタイミング間違えたか俺!?!」

「僕の墓地からモンスターを特殊召喚！蘇れ！《獣神王バルバロス》!!」

墓場から蘇る、《獣神王バルバロス》。

その姿はところどころ骨が見え、肉が腐るなどしているが、別にアムデット族になっていないわけではない。

獣神王バルバロス

レベル8 地属性 獣戦士族

攻撃力：3000

「《獣神王バルバロス》の効果が発動！フィールドか墓地からバルバロスモンスター1体を除外する事で、相手フィールドのカードを2枚破壊する！僕は墓地の《神獣王バルバロス》を除外して、《マスター・ボーイ》と《S R 赤目のダイス》を破壊する！」

「そいつはお断りだ！墓地の《海竜神の激昂》リバイアサンの効果が発動！こいつをゲームから除外して、水属性モンスターの効果破壊を防ぐ！」

《獣神王バルバロス》がその槍を回転させ東雲のフィールドへ突撃するも、その破壊は海から現れた青く巨大な海竜によって防がれる。

なお、《海竜神の激昂》リバイアサンに描かれているこの海竜は《海竜神》リバイアサンというレベル5の通常モンスターなのだが、今となつては見たことがある人は少ない初期のカードだというのは余談だろう。

ちなみに押切は見たことがないが、東雲は兄が持っているのを見たことがある。

「厄介なカードはこれで消せた！手札の《S R タケトンボーグ》スピードロイドの効果が発動！僕のフィールドに風属性モンスターがいる時、特殊召喚できてる！」

風を纏いながら現れる、竹とんぼのロボット。

彼の効果の恐ろしさは、東雲もよく知っている。

スピードロイド
S R タケトンボーグ

レベル3 風属性 機械族

守備力：1200

「……ッ！（この流れは不味い……！止めるには《飢鰐竜アーケティス》の三つ目の効果で、次に出てくるモンスターか《S R ベイゴマックス》を破壊するのだが……そうすると今度は《獣神王バルバロス》の全体攻撃が防げねえ……！かと言って放置しておけば、おそらくレベル7にしてのシンクロ召喚で《クリアウイング・ドラゴン》のどっちかが出て来るだろうが……。どっちにしる効果を無効にされるのは痛い……！……いや、待て。ならここは何もせず、ダメージは食らうが壁にして次のターンに賭けるべきか？幸い、手札は3枚あるから繋げる事はできる……）」

「追加で《S R タケトンボーグ》の効果を発動するよ！このカードをリリースして、デッキからスピードロイドのチューナーモンスターを特殊召喚する！来て！《S R 赤目のダイス》！」
《S R タケトンボーグ》と入れ替わりに現れたのは、全ての面が赤い一つ目の6面ダイス。

クルクルと回転しながら、その力を発揮するのを待っている。

スピードロイド
S R 赤目のダイス

レベル1 風属性 機械族

守備力：100

「まあ、この効果を使ったターンは、風属性モンスター以外を特殊召喚できなくなるんだけどね」

「だから《獣神王バルバロス》をさっきのタイミングで蘇生させたわけか」

「そうだね。それじゃあ、《S R 赤目のダイス》の効果を発動！このカード以外のスピードロイドモンスターのレベルを、1〜6に変更する！《S R ベイゴマックス》のレベルを6にするよー」

スピードロイド
S R ベイゴマックス

レベル3↓6 風属性 機械族

鰐竜アーケティス』に追撃だ！」

「……《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》がいるせいで、《飢鰐竜アーケティス》の効果を使うに使いねえか……！そのまま受けるぞ！」

「オオオオオツツ!!!」

「ギャアアアツツ!!!」

《獣神王バルバロス》が《飢鰐竜アーケティス》の頭に、その槍を叩き込む。

その姿は最早、神話における怪物同士の戦いの様。まあ、これがミニチュアサイズでなければの話だが。

東雲 圭史

ライフポイント：6900↓6400

「最後に、《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で攻撃！ダイレクトアタックだ！」

「クウウツ!!」

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》の放つ風のブレスが、東雲のアバターを襲い浅くはないダメージを与える。

東雲 圭史

ライフポイント：6400↓3900

「もうこのターンはできることはないし、このままターンエンドだよ」

押切 冴香

ライフポイント：7000

手札：0枚

フィールド：獣神王バルバロス、クリアウイング・シンクロ・ドラゴン

東雲 圭史

ライフポイント：3900

手札：3枚（1枚はオイスターマイスター）

フィールド：ウオーター・ハザード

「俺のターン、ドロロー!!……これなら……よし。まずは《強欲なウツボ》を発動!《ウオーターハザード》の効果が発動するぜ。手札の水属性モンスター2体をデッキに戻し、3枚ドロローする!手札の《レフトハンド・シャーク》と《ヒゲアンコウ》をデッキに戻し、3枚ドロローする!」

「むむ……手札交換か」

「頼むぜ来てくれよ……ドロロー……よしよし!《ウオーターハザード》の効果が発動!手札から《オイスターマイスター》を特殊召喚する!」

海から再び東雲のフィールドへと現れる、《オイスターマイスター》。

だが、その姿は先ほどとは若干異なる点が一つあり、背中に何かがかつついている。

オイスターマイスター

レベル3 水属性 魚族

攻撃力：1600

「そして魚族モンスターが召喚・特殊召喚された事で、手札の《シャーク・サッカー》の効果が発動!こいつを特殊召喚する!」

《オイスターマイスター》の背中にくつついていたのは、コバンザメのモンスターである《シャーク・サッカー》。

その背面の吸盤で、《オイスターマイスター》にくつつき共に出現したのだ。

シャーク・サッカー

レベル3 水属性 魚族

守備力：1000

「更に、《レフトハンド・シャーク》を通常召喚する!」

「あれ?《強欲なウツボ》で戻してなかった?また手札に戻って来たの?」

「……おう、3積みしてるからな」

どこか悲しい目をする東雲だが、それはともかくとしてフィールドには左手の様な姿をした、些か奇妙なサメが現れる。

レフトハンド・シャーク

レベル3 水属性 魚族

攻撃力：1300

「《オイスターマイスター》と《シャーク・サッカー》でリンク召喚！召喚条件は魚族・海竜族・水族モンスターを2体！リンク召喚！現れろ！《水精鱗―サラキアビス》！」

水精鱗―サラキアビス

リンク2 水属性 海竜族

攻撃力：1600

「続けて《オイスターマイスター》が戦闘破壊以外でフィールドから墓地へ送られた時、《オイスタートークン》を1体特殊召喚する！」

2体のモンスターが美しい海の女戦士へとなると、《オイスターマイスター》のいた場所には再びただの牡蠣にしか見えない《オイスタートークン》が残される。

《水精鱗―サラキアビス》の目が、完全に美味しいご飯を見る目になっているのは、きつと気のせいだろう。

オイスタートークン

レベル1 水属性 魚族

守備力：0

「畳みかけるぞ！《オイスタートークン》1体でリンク召喚！召喚条件はレベル1のモンスター1体！現れろ！《リンクリボー》！《水精鱗―サラキアビス》の右下に召喚しておくが、《水精鱗―サラキアビス》の効果でリンク先のモンスターである《リンクリボー》の攻撃力は500アップするぞ」

《オイスタートークン》が素材となり《リンクリボー》が現れるが、《水精鱗―サラキアビス》が若干がっかりした様な表情を見せるのも、

たぶん、おそらく、きつと、気のせいだ。

リンクリボー

リンク1 闇属性 サイバース族

攻撃力：3000↓800

「これで俺のフィールドには、《水精鱗―サラキアビス》と《リンクリ

ポー』と《レフトハンド・シャーク》の3体！これで条件は満たした！」

「いったい何を……!？」

「召喚条件は、効果モンスター4体以上！そしてこいつの召喚には、お前のモンスター1体を使う事もできる！」

「その召喚条件は!?!まさかあのカードを!？」

「俺のフィールドのモンスター全てと、お前の《獣神王バルバロス》を使用し、リンク召喚！リンク5！現れる！《閉ザサレシ世界ノ冥神》サロスIIエレス・クルヌギアス!!」

東雲の全てのモンスターたちと、押切の《獣神王バルバロス》という、合計で4体のモンスターたちを素材として召喚されるのは、巨大なドラゴンや邪悪な魔物などではなく、1人の美しい、しかし強い死の臭いを纏った女神。

サロスIIエレス・クルヌギアス
閉ザサレシ世界ノ冥神

リンク5 光属性 悪魔族

攻撃力：3000

「《閉ザサレシ世界ノ冥神》がリンク召喚に成功した時、効果を発動！

お前の表側表示のモンスター全ての効果を無効化する！」

「なんで魚族メインのデッキで、そんなカードを入れたの!？」

「いや、ほら。結構大量に展開すること多いから、出せるな……つて気が付いたら入れてた」

「まさに今の状況がそうだよ！」

「バトルフェイズだ！《閉ザサレシ世界ノ冥神》で《クリアウイング・

シンクロ・ドラゴン》を攻撃！」

「それはさせない！墓地の《S R 三つ目のダイス》の効果を発動！このカードを除外して、攻撃を無効にする！」

《閉ザサレシ世界ノ冥神》が《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》をその神威の光で攻撃するも、それは回転しながら墓地から現れたスピードロイド《S R 三つ目のダイス》により阻まれてしまう。

「チッ、防がれたか。俺はこのまま、ターンエンドだ」

押切 冴香

ライフポイント：7000

手札：0枚

フィールド：クリアウイング・シンクロ・ドラゴン

東雲 圭史

ライフポイント：3900

手札：1枚

フィールド：閉ザサレシ世界ノ冥神、ウオーター・ハザード

「僕のターン、ドロロー！あ、なんとかなった」

「え、嘘だろおい」

「今引いたの、《獣神機王バルバロスU_r》だね」

「こんなピンポイントで単純に殴り勝てるカード引くかあ!？」

「墓地の獣戦士族である《忍犬ワンダードッグ》と、機械族である

《S R タケトンボーグ》を除外して、手札から特殊召喚！」

「(ガアアアアツツ!!)」

墓地のモンスターたちを除外して現れたのは、《獣神王バルバロス》によく似た、しかしよりメカニカルな装備を身に纏う戦士。

その機械槍を《閉ザサレシ世界ノ冥神》に向けると、咆哮を轟かせて戦意を見せる。

獣神機王バルバロスU_r

レベル8 地属性 獣戦士族

攻撃力：3800

「バトルだよ！《獣神機王バルバロスU_r》で《閉ザサレシ世界ノ冥神》を攻撃！」

「チィ……ッ！破壊はされるが、《獣神機王バルバロスU_r》の効果でダメージは受けない！」

「まだまだ！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》で攻撃！ダイレクトアタックだ！」

「まだライフは残る……!!」

《獣神機王バルバロスU_r》の機械によって強化された一撃が、

《閉ザサレシ世界ノ冥神》を破壊して爆散させると、その爆風を切り裂いて《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》が飛び、東雲のアバターを爪で切り裂く。

東雲 圭史

ライフポイント：3900↓1400

「これで僕はターンエンド！」

押切 冴香

ライフポイント：7000

手札：0枚

フィールド：クリアウイング・シンクロ・ドラゴン、獣神機王バルバロスU^{ウル}r

東雲 圭史

ライフポイント：1400

手札：1枚

フィールド：ウォーター・ハザード

「俺は（カルボナーラを）諦めない！ドロー！……墓地の《フィツシュボーグーアーチャー》の効果を発動！俺のフィールドにモンスターが存在しない時、手札の水属性モンスターを1体墓地へ捨てて特殊召喚できる！《超古深海王シーラカンス》を墓地へ捨てて、特殊召喚！」

墓地から現れる、機械のケンタウロス。
手足を折り畳み、水槽の中のアシカたちを守りながら戦況を確認している。

フィツシュボーグーアーチャー

レベル3 水属性 魚族

守備力：300

「さらに手札から、《レフトハンド・シャーク》を通常召喚！」

「また来たの!?!そんなに集まって来る!?!」

「なんか今日、《レフトハンド・シャーク》がめっちゃ来る日らしい……」

東雲のフィールドに再び現れる、《レフトハンド・シャーク》。
今日はやたらとその顔を見る気がするが、たまにはそんな日もあ
る。

レフトハンド・シャーク

レベル3 水属性 魚族

攻撃力：1300

「2体のモンスターで、オーバレイネットワークを構築！現れろ！
ランク3！《No.30 破滅のアシッド・ゴーレム》!!」

「《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を攻略するつもりだね！」
「オオオオオオ……」

水面が盛り上がり現れたのは、その全身を酸で溶かす巖の巨躯。

その酸はまだ東雲のアバターに届いていないが、彼を焼くのも時間
の問題だろう。

ナンバーズ
No.30 破滅のアシッド・ゴーレム

ランク3 水属性 岩石族

攻撃力：3000

「《フィッシュボーグーアーチャー》には自身の効果で特殊召喚した
ターンのバトルフェイズに、俺の水属性以外のモンスターを破壊する
効果があるがこいつは水属性だから問題はない。そして《レフトハン
ド・シャーク》が水属性モンスターののみを使用してのエクシーズ素材
となった時の効果だ！こいつを素材にして召喚したエクシーズモン
スターは、効果では破壊されない効果を得る！」

「なるほど、ずっと地属性だと思ってた」

「まあ、ゴーレムって名前だしな。それじゃあ、バトルだ！《No.3
0 破滅のアシッド・ゴーレム》で、《クリアウイング・シンクロ・ド
ラゴン》を攻撃！」

「通るよー」

ナンバーズ
《No.30 破滅のアシッド・ゴーレム》の拳が、《クリアウイング・
シンクロ・ドラゴン》を強かに打ち据え、叩き落とす。

押切 冴香

ライフポイント：7000↓6500

「これでターンエンドだ」

押切 冴香

ライフポイント：6500

手札：0枚

フィールド：獣神機王バルバロスUr

東雲 圭史

ライフポイント：1400

手札：0枚

フィールド：ナシバースNo.30 破滅のアシッド・ゴーレム、ウォーター・

ハザード

「僕のターン、ドロロー……あ、勝った」

「え」

「装備魔法《愚鈍の斧》を、《獣神機王バルバロスUr》に装備する」

「《愚鈍の斧》……攻撃力1000アップに加えて、装備したモンスターの効果を無効にするカード……か」

「そう……つまりこれで、《獣神機王バルバロスUr》のダメージを与えられない効果も無効になる!!」

《獣神機王バルバロスUr》が槍を捨てる。

いや、それだけではない。捨てられたのは槍だけではなく、全身を覆う装甲。

重いそれらを捨て、代わりに斧による一撃必殺に全てを込める。

獣神機王バルバロスUr

レベル8 地属性 獣戦士族

攻撃力：3800↓4800

「バトルだよ！《ナシバースNo.30 破滅のアシッド・ゴーレム》に、《獣神機王バルバロスUr》で攻撃！」

「俺の……俺のカルボナーラがアアアツツ!!!」

東雲 圭史

ライフポイント：1400↓0

「あー……クソ。今回の敗因あれだな……。地味に要所要所で攻撃止められたのが辛かったな……。あの《メタル・リフレクト・スライム》は、《神・スライム》にして《神獣王バルバロス》の3体リリース確保のためだろ？」

「そうそう。で、さつきみたいに咄嗟に防御するのもも使えるから入れたんだよね。《S R 三つ目のダイス》で《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を攻撃できなかった時も、苦しそうだったよ」

「あれで決めたらなあ……。それこそ《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》がいるせいで、《超古深海王シーラカンス》からの大量展開とか、シンクロ召喚での効果発動とかも封じられてたしな。……まあ、仕方ねえ。グラタンの買い物行くかあ……」

「やったー!!」

家に着き、エプロンを身に着ける東雲。

買い物をしながら、グラタンの作り方は思い浮かべていた。

どう考えても面倒臭い、ホワイトソース作りは時間削減のために今回はレトルトを使用することにしておいた。

代わりに、具でひと工夫をする。

その具こそ、今日のデュエルで何度も見た《オイスタートークン》ごと、牡蠣だ。

ちなみに、牡蠣は生食用と加熱用では、加熱用の方が美味しい。

生食用は体内の細菌やウイルスを除去するためにしばらく海水に浸けて断食させるため、身が痩せてしまうためだそうだ。

まずは先日カレーを作った際に残った玉ねぎを薄切りにし、ついでにジャガイモも薄切りにする。

彩りとしてホウレンソウも手頃な長さに切り分け、サラダ油を敷いたフライパンに切った材料と牡蠣を投入する。

ここで何より大事なのが、牡蠣にしつかり火を通すこと。

この後オーブンで加熱するとはいえ、それでも牡蠣に当たるのは怖い。

牡蠣が鉄砲貝と呼ばれるのは、ノロウイルスを始めとする感染があるからだ。

ウイルスなんて、《死のデッキ破壊ウイルス》などのウイルスカードで十分なのだ。

材料を炒めたらホワイトソースと一緒に耐熱容器に移し、チーズを乗せる。

事前に200℃で予熱していたオーブンで焼き目を付ければ、完成だ。

「そら、できたぞ」

「やった！グラタングラタン！」

先に缶ビールを飲みながら待っていた押切のもとへ、グラタンが運ばれる。

その中身が何かを、彼女はまだ知らない。

東雲が買い物をしている最中に、以前買い損ねた食玩をコッソリ買いいに行っていたからだ。

「それじゃあ」

「いただきます」

焼き目が付き、パリッとしたチーズをスプーンで割ると、とろりとしたホワイトソースが湯気と共に現れる。

舌を火傷しない様に、ふうふうと息を吹きかけ冷ましてから、パクリ。

「……ん？お！おお！牡蠣だね！グラタンに牡蠣が入ってるの、初めて食べたけど美味しいね、これ！」

「俺も聞いたことはあったが、実際に作るのは初めてだな。ん、美味しい。我ながら天才か……？」

「それはちよつと自信過剰かなー」

「お前も料理するようになってから言え」

寒い外と、熱いグラタン。それから冷えたビールがたくさん。

2人の休日は、これから始まる。

キャンプカルボナーラ

押切に負けた金曜日の翌日。

つまりは土曜日に、東雲は必ずある事をする。

朝、休日なのに早めに起きたらご飯を炊き、1人分の朝食と昼食を作っておく。

その間にパスタの乾麺を水を入れたジップロックに浸けておき、リュックサックに保冷水筒に入れた牛乳と卵を用意する。

いくつかの材料も刻んでビニール袋に入れ、準備をしておく。

ガスボンベの容量を確認し、その他必要な物をリュックサックに詰めて準備完了だ。

「冴香ー、昼飯は冷蔵庫に入れてあるからな。夕方には帰るぞー」

「はーい」

土曜の朝から缶ビールを開けて、前日録画しておいたテレビ番組を見ている押切に声をかけてから、家を出る。

10年間愛用のD・ホイールに跨り、向かう先はとある山の中。

「流石に冷えるな……」

冬に差し掛かった季節の風が、骨身に染みる。

それでも、速度は緩めずひたすら向かう。

負けた翌日の日中。

東雲は日帰りでソロキャンプに必ず行く。

「やっ、と」

D・ホイールを山の中に進め、途中にある駐輪場に停める。

ここから先は、15分ほど徒歩で行く必要がある。

子供のころから何度も来た、慣れ親しんだ道を迷うことなく歩く。

そうして辿り着く、山の中にある小さな沢。

そこがいつもの場所だ。

「おっ」

到着してから気が付くが、見れば先客がいる。

地元の子供たちだろうか、2人程釣り竿を手に、沢に糸を垂らしている。

とはいえ、東雲からすれば関係のない子供たち。

気にせずに設営場所を確保し、キャンプの準備を進める。

東雲の土曜日のソロキャンプは、テントの設営はしない。

前日食べられなかった食べたい物を食べる。

これはそのためだけのソロキャンプだからだ。

なので必要なのは、ガスコンロやまな板等を安全に置けるスペースと、自分がゆったり休めるスペース。

リュックサックから椅子を取り出し、浅く腰掛ける。

焚火をするつもりはなかったが、ここ数日晴れた日が続いていたためか、ここに来る最中に見かけた薪にできそうな小枝等は乾いていた。

そしてここに来るまでに、体は風で冷えてしまっている。

「……やるか」

リュックサックから小型の焚火台を取り出し、適度に小石を地面から取り除いて整地してから設置する。

ささつと山から小枝を拾って来て折り、経験に従って少量を焚火台の上へ並べる。

ライターでティッシュに火を点けてから焚火台に入れ、後はじっくりと火を育てていく。

「あつたけえ……」

このままこの火で、持つて来た牛乳を温めたくなるが、それをする
と本来の目的が果たせなくなるのでやめておく。

しばらく火を見詰め、暖まりながら過ごすこと数分。

子供たちが何か釣れたのだろうか、はしやぐ声をきっかけに動き出す。

「よし、作るか」

焚火の火では調理は難しいため、ガスコンロを使う。

朝に刻んで準備しておいたベーコンをフライパンで炒め、その間に卵とチーズに牛乳をビニール袋の中で混ぜておく。

ベーコンが炒まったところで火を弱火にし、水に数時間浸けておい
た。パスタと先程の卵液をフライパンへ投入する。

水分がある程度飛ぶまでパスタとソースを絡めたら、最後に黒コ
シヨウを振りかけて完成だ。

「……よーしよーしよーし、いただきます」

1人だという事に加え、洗い場のない山の中の沢。

持って帰る洗い物を減らすためにも、フライパンのまま箸で食べ
る。

「……ん、美味しい」

茹でるのではなく、水に浸けて戻したパスタは生パスタの様にモチ
モチとしている。

そこに絡むカルボナーラのソースが、簡単に作った割には美味しい。

今日はD・ホイールで来たため酒はなしだが、代わりにノンアル
コールビールを持ってきている。

それを開けて喉を鳴らして飲むが、口の中のもったりとしたソース
が洗い流され、これがまた美味しい。

そうして黙々と食べていると、ふと気が付いた。

「……………」

見ている。

先程まで釣りをしていたはずの子供たちが、結構な近距離でこちら
を見ている。

一体何事か、と考え、そこで目線の先に気が付いた。

東雲の手の中の、カルボナーラだ。

「……やらんぞ」

「えー！」

「おじさんのケチー！」

「お兄さんな。俺はまだ26歳だガキ共」

見たところまだ小学校高学年の仲良し男女といったところか。

そんな子供たちにおじさんと呼ばれるほど歳を取ったとは思って
いない東雲だが、言われたら言われたで少し気にはなる。

とりあえず、騒ぐ子供たちを放置して、そのままカルボナーラを食

べきってしまおう。

そもそも一人分しか作ってないのだ。

例えば子供だろうと、人にあげる分はない。

「あー！食べちゃったー!!」

「おじさんひどいぜ!!」

「見ず知らずのお兄さんにたかるなガキ共。お前らみたいなのが近所の柿の木から勝手に実を採って怒られるんだ」

「……………」

「おい、何で黙る？え？まさかマジでやったのお前ら？」

自分の祖父世代ばりのわんぱくぶりな子供たちに、流石にちよつと引く東雲。

とはいえよくよく思い返せば、自分は彼ら以上の悪ガキだった記憶もある。

ちよつと叱りづらい面もあるので、ため息を吐きつつ子供相手だ仕方ない。とデツキとデュエルディスクを取り出す。

「まあ、それはいいか？おい、お前ら腹減ってるか？」

「うん！もうペコペコ！」

「だからおじ…………お兄さんのスパゲッティ食べたかったんだよ」

「じゃあ、俺とデュエルして勝ったら、さっきのは無理だけど良いもん食わせてやるよ」

「やった！」

「必ず勝ってやるぜー」

東雲の言葉に、子供たちも並んでデュエルディスクを構える。

バトルロイヤルルールでのデュエルが始まる――

「おい、順番に1人ずつにしろ。俺も流石に2対1はキツイ。どつちか1人でも勝ったら、それで食わせてやるから」

「はーい」

――事はなかった。

当たり前前の話だが、ルールがややこしくなる上に2対1ではまともにデュエルができない。

「そうだ。デュエルする相手の名前知らないのも格好が付かねえな。

俺は『東雲 圭史』だ。お前たちは?」

東雲の問いかけに、寒い中でも短パンの少年が名乗りを始める。

「オレは『五反田 倫太』だぜ! こっちはカツちゃんだ!」

「痛ッ!? 痛いよリンちゃん!」

五反田がカツちゃんと呼ぶ少女の背中をバシバシ叩きながら、彼女を紹介する。

それに軽く涙目になりながらも、彼女は自分で自己紹介するために口を開く。

「ボクは『森山 勝蔵』です! よろしくお願いします!」

「おー、よろし……く……?」

東雲の、脳が、停止した。

なんとか脳の再起動をかけたところで、現状を認識する。

相手はポニーテールに、華奢な体が見たところ特徴。見た目は完全に、ボーイツシユな小学生女子。

だが、それでも。

「勝蔵!」

「え、あ、はい。勝蔵です」

勝蔵は勝蔵なのだった。

「なんだよ、おじ……お兄さん。カツちゃんは勝蔵に決まってるだろー。良いから早くやろうぜ! オレからいくぞ!」

「お、おう……うん? うん」

何か納得しきれないものを感じながらも、デュエルディスクを構える二人。

「デュエル!!」

先行を知らせるデュエルディスクのターンランプは、五反田に灯される。

五反田 倫太

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「よし！オレの先行だな！まずは永続魔法の《前線基地》を発動するぜ！」

「《前線基地》ってことは、ユニオンデツキか」

「おう！《前線基地》の効果を発動！1ターンに1度、手札からレベル4以下のユニオンモンスターを特殊召喚する！《Zーメタル・キャタピラー》だ！」

まず現れたのは、黄色いボディの未来的な戦車。

その名称そのままのキャタピラが、唸りを上げて戦意を見せる。

Zーメタル・キャタピラー

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1500

「続いて《Xーヘッド・キャノン》を通常召喚するぜ！」

《Zーメタル・キャタピラー》の隣に現れるのは、両肩にキャノン砲を備えた機械の砲撃手。

デュエルディスクでのデュエルであるため、その砲口はアバターではなく東雲本人に向けられている。

Xーヘッド・キャノン

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1800

「これでXとZが揃ったか……。融合はするのか？」

「ちよつと悩みどころだなー。まあ、やっておくか！《Xーヘッド・キャノン》と《Zーメタル・キャタピラー》を除外して、合体融合だ！《XZーキャタピラー・キャノン》！進撃だー!!」

そして《Zーメタル・キャタピラー》の上面の結合ユニットに、《Xーヘッド・キャノン》の下半身部分の結合ユニットが合わさり、合体を遂げる。

キャノン砲の攻撃力と、キャタピラの機動力を得たその姿は、ただ合体するだけではなく新たな能力も与える。

XZーキャタピラー・キャノン

レベル6 光属性 機械族

攻撃力：2400

「こいつには手札を1枚捨てることで、そっちのフィールドのセットされてる魔法・罠カードを破壊する効果があるんだけど、今は先行1ターン目だから使えないな。オレは残った手札2枚をセットして、ターンエンドだぜ！」

五反田 倫太

ライフポイント：8000

手札：0枚

フィールド：XZーキャタピラー・キャノン、前線基地、伏せカード2枚

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「じゃあ、俺のターンだな。ドロー……ふむ、よし。まずは《高等儀式術》を発動する！デッキから通常モンスターを生贄にして、儀式召喚を行うぞ！デッキのレベル1の通常モンスター《プロトロン》1体を生贄に、来い！《サクリファイス》！」

東雲のフィールドで先陣を切るのは、以前にも使った単眼の魔法使い。

どう見ても悪魔族だし、効果も悪魔的なのだが、魔法使い族なのだ。

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

「げ?! 《サクリファイス》って、あの強奪カードだろ?!」

「大正解だ。《サクリファイス》の効果を発動！お前のカードをこのカードに装備させ、その攻撃力と守備力分ステータスをアップさせる！」

「ま、待つて待つて！速攻魔法発動！《無許可の再奇動》！メイルフアクターズ・コマンドオレの機械族モンスターに、手札かデッキから装備可能なユニオンモンスター1体を装備させる！このカードの効果で、デッキから《XZーキャタピラー・キャノン》に《Aーアサルト・コア》を装備！」

《XZーキャタピラー・キャノン》に突如《Aーアサルト・コア》が装備されると、バリアが発生して《サクリファイス》の吸収効果を阻む。「お？《サクリファイス》の効果が無効になった……？いや、違うか。妨害された感じだな。ユニオンカードは詳しくないから、いまいちピンと来ないな」

「《Aーアサルト・コア》が装備されたモンスターは、相手モンスターの効果を受けなくなるんだぜ！」

「ああ、だからか。となると、参ったな……そうになると、だ。《異次元トレーナー》を通常召喚しようか」

フィールドに現れる、凶悪なモンスター……の上で指示を飛ばす眼帯をつけたおっさんのゴブリン。

昭和のボクシングマンガでコーチをしていそうな彼だが、その正体は……その内出るかもしれない。

異次元トレーナー

レベル1 闇属性 悪魔族

攻撃力：1000

「《異次元トレーナー》を素材にリンク召喚だ！召喚条件は通常モンスター1体！現れるろ！《リンクスパイダー》！」

《異次元トレーナー》を素材にして召喚されるのは、おっさん感などどこにもない、サイバー感溢れる蜘蛛。

その効果は、仲間を呼ぶもの。

リンクスパイダー

リンク1 地属性 サイバース族

攻撃力：1000

「《リンクスパイダー》の効果を発動する！手札からレベル4以下の通常モンスターを、このカードのリンク先に特殊召喚する！2体目の《プロトロン》を特殊召喚！」

《リンクスパイダー》の呼び声に応えたのは、丸い形をしたサイバース族の原種。

彼こそがその身に秘めた未知数の情報量で、このデュエルを勝利に導く鍵となる。……かもしれない。

プロトロン

レベル1 地属性 サイバース族

守備力：100

「そのまま3体のモンスターでリンク召喚！召喚条件はリンクモンスターを含むモンスターが2体以上！現れるろ！《天威の鬼神》!!」

そして3体のモンスターを素材に現れる、堕ちた武術家。

その鬼の顔貌が、《XZーキャタピラー・キャノン》を睨み付ける。

天威の鬼神

リンク3 闇属性 幻竜族

攻撃力：3000

「げ!?攻撃力3000!?!」

「効果で対処できないなら、シンプルに殴らせてもらおうか。バトルフェイス！《天威の鬼神》で《XZーキャタピラー・キャノン》を攻撃だ！」

「……ッ！通るぜ！」

五反田 倫太

ライフポイント：8000↓7400

「このターンはこのままエンドする。お前のターンだぜ」

五反田 倫太

ライフポイント：7400

手札：0枚

フィールド：前線基地、伏せカード1枚

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：2枚

フィールド：天威の鬼神

「オレのターン、ドロロー！よっしや来たあ！《テラ・フォーミング》を発動！デツキからフィールド魔法、《ユニオン格納庫》を手札に加えて、そのまま発動するぜ！そして《ユニオン格納庫》の発動時の効果！デツキから光属性機械族のユニオンモンスターを1体手札に加える！《Bーバスター・ドレイク》を手札に！」

「ここでそれを引いて来たかー……」

「《Bーバスター・ドレイク》を《前線基地》の効果で特殊召喚するー！飛行機のような、緑色の機械の龍が翼を翻し、フィールドへと躍り出る。」

Bーバスター・ドレイク

レベル4 光属性 機械族

守備力：1800

「光属性機械族のユニオンモンスターが特殊召喚された事で、《ユニオン格納庫》の効果が発動されるぜ！デツキから装備可能な光属性機械族のユニオンモンスター1体を装備させる！《Cークラッシュ・ワイバーン》を《Bーバスター・ドレイク》に装備！」

「さっきの合体融合思い出すと、嫌な予感しかしないな」

「当たり前だ！フィールドの《Bーバスター・ドレイク》と《Cークラッシュ・ワイバーン》！それから墓地の《Aーアサルト・コア》をゲームから除外して、合体融合！《ABCードラゴン・バスター》進撃だ！！」

「ゴオオオオツツ!!!」

3体の機械のモンスターたちが合体し、新たな姿を形作る。

双頭の機械龍となり、その胴体にはあらゆる物を破壊するキャノン砲が装備されている。

その姿はまさに、機械で作られた荒ぶる破壊龍。

ABCードラゴン・バスター

レベル8 光属性 機械族

攻撃力：3000

「更に！残ってたりバースカードを発動！《スクランブル・ユニオン》！除外されている光属性機械族の通常モンスターかユニオンモンスターを、3体まで特殊召喚できる！《X―ヘッド・キャノン》と《Z―メタル・キャタピラー》、それから《A―アサルト・コア》を特殊召喚！」

X―ヘッド・キャノン

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1800

Z―メタル・キャタピラー

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1500

A―アサルト・コア

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1900

「《X―ヘッド・キャノン》と《Z―メタル・キャタピラー》でオーバーレイネットワークを構築！召喚条件はレベル4の機械族モンスター2体！《ギアギガントX》^{クロス}、進撃だ！」

「機械族の定番来たな」

除外から再びフィールドへと呼び出された、《X―ヘッド・キャノン》と《Z―メタル・キャタピラー》たち。

今度は《XZ―キャタピラー・キャノン》に合体させるのではなく、歯車を背負った新たな機械の戦士を呼び出す素材となる。

ギアギガントX^{クロス}

ランク4 地属性 機械族

攻撃力：2300

「《ギアギガントX》^{クロス}の効果を発動！エクシース素材を1つ取り除いて、デツキか墓地からレベル4以下の機械族モンスターを手札に加える！オレはデツキから《Y―ドラゴン・ヘッド》を手札に加えるぜ！これで弾ができた！」

「嫌な予感しかしないな、おい」

「当たり前だぜ！《ABCードドラゴン・バスター》の効果を発動！手札を1枚捨てて、フィールドのカードを1枚除外するぜ！《天威の鬼神》を除外！」

「ゴオオオオツツ!!!」

「グアアアアツツ!!!」

手札をエネルギーに変えてビーム兵器にして放つ、極めて強力な破壊の一撃が《天威の鬼神》の胴体を穿ち致命傷を与えて行く。

そして五反田の攻撃は、これで止まらない。

「クツ!?こいつはマズいな……!」

「バトルフェイズ！全軍総攻撃だ！」

「ウオオオツツ!!!」

東雲 圭史

ライフポイント：8000↓6100↓3800↓800

「一気に0にはできなかつたけど、だいぶ減らせたぜ！最後に《Aーアサルト・コア》を《ABCードドラゴン・バスター》に装備させる！これでターンエンドだ！」

《Aーアサルト・コア》が《ABCードドラゴン・バスター》に装備されるが、そもそも《ABCードドラゴン・バスター》は《Bーバスター・ドレイク》と《Cークラッシュ・ワイバーン》が《Aーアサルト・コア》と合体しているモンスター。

2体目の《Aーアサルト・コア》がどこに装備されるのかというと、パーツ毎にバラバラに分割されて《ABCードドラゴン・バスター》の各所に装甲として配置されていく。

些か強引過ぎる気もしないでもない、そんな装備方法だった。

五反田 倫太

ライフポイント：7400

手札：0枚

フィールド：ABCードドラゴン・バスター、ギアギガントX、Aーアサルト・コア（ABCードドラゴン・バスターに装備中）、前線基地、

ユニオン格納庫

東雲 圭史

ライフポイント：800

手札：2枚

フィールド：なし

「俺の……ターン！ドロー……お、よしよし！《儀式の準備》を発動！デッキからレベル7以下の儀式モンスターを手札に加えて、その後墓地から儀式魔法を手札に加える！デッキから《ライカン・スロープ》を手札に加えて、墓地からは《高等儀式術》を手札に！そしてそのまま《高等儀式術》を発動！デッキからレベル1の通常モンスターである、《ガード・オブ・フレムベル》1体と《異次元トレーナー》2体、《バニーラ》3体を生贄に捧げて儀式召喚！現れる！《ライカン・スロープ》!!」

「アオオオオンツツ!!」

6体の生贄が捧げられ、人造の魔狼がフィールドに現れ、高らかに遠吠えを上げる。

日毎ミニチュアサイズでの登場が多いからか、随分と解放的な様子を見せている。

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400

「なんだよ、攻撃力2400か。それでオレの《ギアギガントX》クロスを攻撃するのかわ？」

「実はこの世には、レベル6以下の儀式モンスター専用の装備魔法がある。《リチュアル・ウェポン》を《ライカン・スロープ》に装備！攻撃力と守備力を、1500アップさせる！」

「1500アップう!？」

《ライカン・スロープ》の全身に、レベル6以下の儀式モンスター選ばれし者しか装備できない鎧と剣が装備されていく。

この鎧と剣はまさしく強力であり、装備できるならば戦士族のハン

ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン
バーガーですら《青眼の白龍》などの最上級モンスターを倒す事ができる様になるのだ。

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400↓3900

「おっと、まだ終わらないぞ？最後の手札、《龍の鏡》を発動！自分のフィールドか墓地からカードを除外して、ドラゴン族モンスターを融合召喚する！こいつの融合素材は、通常モンスターを2体！墓地から《プロトロン》2体をゲームから除外し、現れる！《始祖竜ワイアーム》!!」

墓地から可能性を秘めた情報体たちが素材となり、上空から強力なドラゴンが現れる。

始祖竜ワイアーム

レベル9 闇属性 ドラゴン族

攻撃力：2700

「バトルだ！《始祖竜ワイアーム》で、《ギアギガントX》を攻撃！」「うわあ!？」

《始祖竜ワイアーム》がその顎を開き強襲をかけると、回避や迎撃もできずに成す術なく破壊されてしまう、《ギアギガントX》。

これが【ギアギア】デツキならばこれでまた効果が発動するが、今回はそれはない。

五反田 倫太

ライフポイント：7400↓7000

「追撃だ！《ライカン・スロープ》で《ABCードドラゴン・バスター》を攻撃!!」

「うわわ!？」

《リチュアル・ウエポン》を装備した《ライカン・スロープ》が《ABCードドラゴン・バスター》に襲いかかり、手にした剣で一刀両断する……かと思いきや、装甲となっていた《A―アサルト・コア》に防がれ、その装甲を破壊するに留まる。

僅かな間シヨートの火花が散ると、そのまま《A―アサルト・コア》

は爆散してその余波が五反田を襲った。

だが、それで《ライカン・スロープ》の攻撃は終わらない。

五反田 倫太

ライフポイント：7000↓6100

「チツ、ユニオンモンスターの特性か。だが、《ライカン・スロープ》が相手に戦闘ダメージを与えた事で、効果発動！俺の墓地の通常モンスターの数×200ポイントのダメージを与える！墓地の通常モンスターは7体だから、1400ポイントのダメージだ！『シャドウ・ダンス』！」

「ま、まだまだあ!!」

《ライカン・スロープ》の影が動く、影の爪や牙が実体化して五反田を襲い、追撃のダメージを与える。

五反田 倫太

ライフポイント：6100↓4700

「ダメージは喰らったけど、《Aーアサルト・コア》がフィールドから墓地へ送られた場合の効果が発動！このカード以外の墓地のユニオンモンスターを1体手札へ戻す！オレは《Zーメタル・キヤタピラー》を手札へ加えるぜ！」

「なら、もうできることもないし、これでターンエンドだ」

五反田 倫太

ライフポイント：4700

手札：1枚（Zーメタル・キヤタピラー）

フィールド：前線基地、ユニオン格納庫

東雲 圭史

ライフポイント：800

手札：0枚

フィールド：ライカン・スロープ、始祖竜ワイアーム、リチュアル・ウエポン（ライカン・スロープに装備中）

「オレのターン、ドロロー！……うーん、ここで来ちやったかあ。仕方な

い、《前線基地》の効果を発動して、手札の《Z—メタル・キャタピラー》を特殊召喚するぜ」

Z—メタル・キャタピラー

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1500

「そうしたら、光属性で機械族のユニオンモンスターが特殊召喚された事で、《ユニオン格納庫》の効果を発動！装備可能で名前の違う光属性・機械族のユニオンモンスターをデッキから装備させるぜ！オレは《A—アサルト・コア》を装備させる！」

「またそいつか。確かにモンスター効果を受けなくさせる効果は厄介だけど、もう少し労わってやれよ。ウチの会社みたいに見えるぞ」

「デュエルで何の話してるんだ!?!」

「……気にするな。ちよつと週明けが辛くなっただけだから」

「……大人って……」

いつの時代も、ちよつと悲しいのが大人の世界。

それを垣間見た子供たちだが、五反田はデュエル中であるため、それを振り払い気を入れなおす。

「よ、よし！オレはまだ続けるぞ！《ABC—ドラゴン・バスター》の効果を発動！手札を1枚捨てて、フィールドのカードを1枚除外する！《ライカン・スロープ》を除外するぜ！」

手札の《大欲な壺》が墓地へと送られエネルギーへと変換される。そして放たれた《ABC—ドラゴン・バスター》の砲撃に飲まれ、フィールドから除外される《ライカン・スロープ》。

と、ここでデュエルを見守っていた森山が、ある事に気付いた。

「……あれ？リンちゃんリンちゃん。ボクちよつと気付いたんだけど。今の除外って、《ライカン・スロープ》じゃなくて装備してた《リチュアル・ウエポン》を除外して、残った《ライカン・スロープ》を攻撃すれば600ダメージになったんじゃない？そうすれば、《始祖竜ワイーム》を攻撃するよりちよつとは大きなダメージになったよ？」

「……………あ」

「あ、本当だな。俺もよくやるぞ、そういうの」

うんうん。と、共感しながら頷く東雲の前に、固まっている五反田。つつい目の前の攻撃力が高いモンスターを排除してしまいたくなり、全体が見えなくなる現象。

デュエル中には割とよく見られる光景である。

「く、クツソー！いいや！バトルだ！《ABCードドラゴン・バスター》で《始祖竜ワイアーム》を攻撃！」

「ダメージは受けるが、《始祖竜ワイアーム》は効果モンスターとの戦闘では破壊されないぜ」

東雲 圭史

ライフポイント：800↓500

「《Zーメタル・キャタピラー》だと攻撃したら、逆にダメージ受けちゃうしな……。ここはメインフェイズ2に入って……」

ここでふと、五反田の手が止まる。

墓地にある、《スクランブル・ユニオン》。このカードは墓地から除外することで、除外されている光属性・機械族の通常モンスターかユニオンモンスターを1体手札に加える効果がある。

召喚権は残っているとはいえ、ここで使うべきだろうか。

今除外されているカードは《Bーバスター・ドレイク》と《Cークラッシュ・ワイバーン》の2枚。

先程使えなかったため、手札コストとして活用した《大欲な壺》や《スクランブル・ユニオン》の様に、3枚除外されている必要があるカードがこのデッキには多めに入っている。

となれば、ここは使わずに温存しておくという選択肢もある。

幸い、ライフポイントは五反田が上回っているのだ。

「……よし、このままターンエンドするぜ！」

五反田 倫太

ライフポイント：4700

手札：0枚

フィールド：ABCードドラゴン・バスター、Zーメタル・キャタピ

ラー、A―アサルト・コア（Z―メタル・キャタピラーに装備中）、前線基地、ユニオン格納庫

東雲 圭史

ライフポイント：500

手札：0枚

フィールド：始祖竜ワイアーム

「さて、状況はクツソ悪いが、とにかくドロ―するか。ドロ―！……引きは悪くないな。今引いた《儀式の下準備》を発動！デッキから儀式魔法を1枚と、それに名前が書かれた儀式モンスターをデッキか墓地から手札に加える！《イリユージョンの儀式》と、それに名前が書かれている《サクリファイス》を手札に加えるぜ！そしてそのまま《イリユージョンの儀式》を発動！レベル1以上になるように生贄を捧げ、《サクリファイス》を儀式召喚する！《始祖竜ワイアーム》を生贄に、現れる《サクリファイス》!!」

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

このデュエルで、2度目となる《サクリファイス》の登場。

だが、決定的に前回の登場と異なる点が、一つある。

「こいつの効果を止める手は、今はないよな？《サクリファイス》の効果を発動！《ABC―ドラゴン・バスター》をこいつに装備させて、攻撃力と守備力をアップ！」

「止められ……ない……ッ！」

今度は阻むバリアはなく、《ABC―ドラゴン・バスター》を吸収する《サクリファイス》。

その姿はどこか満足気な様子を見せている。

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0↓3000

「そしてバトルだ！《サクリファイス》で《Z―メタル・キャタピラー》

を攻撃！……つと、行きたいけど、それをするとまた《A―アサルト・コア》の効果が発動されるのか。悩みどころだな」

「……………」

五反田の墓地にいるユニオンモンスターは、もう1体の《A―アサルト・コア》と《Y―ドラゴン・ヘッド》の2体。

《A―アサルト・コア》は、同名モンスターを手札に加える事への制限はない。

となれば、ここで《Z―メタル・キャタピラー》を攻撃したところで《A―アサルト・コア》の効果を発動されれば、結局次のターンで厄介な事には変わりない。

「仕方ねえな。ここはターンエンドだ」

五反田 倫太

ライフポイント：4700

手札：0枚

フィールド：Z―メタル・キャタピラー、A―アサルト・コア（Z―メタル・キャタピラーに装備中）、前線基地、ユニオン格納庫

東雲 圭史

ライフポイント：500

手札：0枚

フィールド：サクリファイス、ABC―ドラゴン・バスター（サクリファイスに装備中）

「俺のターン、ドロ―！……うぐぐ、《Z―メタル・キャタピラー》に装備している、《A―アサルト・コア》の効果を発動！こいつを装備から解除して、特殊召喚する！《ユニオン格納庫》の効果はまだ使わない！」

A―アサルト・コア

レベル4 光属性 機械族

攻撃力：1900

「ここで墓地の《スクランブル・ユニオン》の効果を発動！このカード

を墓地から除外して、除外されている光属性・機械族のユニオンモンスター1体を手札に加える！《Cークラツシュ・ワイバーン》を手札に加える！そして《前線基地》の効果を発動！《Cークラツシュ・ワイバーン》を準備表示で特殊召喚！」

Cークラツシュ・ワイバーン

レベル4 光属性 機械族

守備力：2000

「この特殊召喚で《ユニオン格納庫》の効果を発動！デッキから《Aーアサルト・コア》を《Cークラツシュ・ワイバーン》に装備！」
「もうそいつ制限カードにしろ！」

3体目の《Aーアサルト・コア》の登場に、流石にちよつと声を荒げる東雲。

ちなみに、制限カードにはその合体融合体の《ABCードラゴン・バスター》がなっている。

「《Zーメタル・キャタピラー》と《Aーアサルト・コア》でオーバーレインネットワークを構築！ランク4！《ギアギガントX》クロスもう一回進撃だ！」

攻撃力3000の《サクリファイズ》を警戒してか、守備表示で召喚される《ギアギガントX》クロスは、その頑丈そうな両手を交差させて防御体勢を整える。

ギアギガントXクロス

ランク4 地属性 機械族

守備力：1500

「《ギアギガントX》クロスの効果を発動！エクシーズ素材の《Aーアサルト・コア》を取り除いて、デッキから《Bーバスター・ドレイク》を手札に加える！最後にカードを1枚伏せてターンエンド！」

五反田 倫太

ライフポイント：4700

手札：1枚（Bーバスター・ドレイク）

フィールド：ギアギガントXクロス、Cークラツシュ・ワイバーン、Aー

アサルト・コア（Cークラッシュ・ワイバーンに装備中）、前線基地、ユニオン格納庫、伏せカード1枚

東雲 圭史

ライフポイント：500

手札：0枚

フィールド：サクリファイス、ABCードドラゴン・バスター（サクリファイスに装備中）

「それじゃあ、俺のターン。ドロロー……なるほど、ここでこいつが来たか。魔法カード《トライワイトゾーン》を発動！墓地からレベル2以下の通常モンスター3体を蘇生させる！選ぶのは《異次元トレーナー》が2体と、《ガード・オブ・フレムベル》が1体だ！戻ってこい！」

墓地から蘇る、3体のモンスター。

その内2体は先程も見たボクシングジム経営していそうなゴブリンだが、他の1体は炎を身に纏う龍。

熱い炎で守る龍が、これからの動きを支えるキーカードとなる。

異次元トレーナー

レベル1 闇属性 悪魔族

守備力：2000

ガード・オブ・フレムベル

レベル1 炎属性 ドラゴン族

守備力：2000

「まずは《ガード・オブ・フレムベル》と《異次元トレーナー》でリンク召喚！召喚条件はチューナーを含むモンスターが2体！リンク召喚！《水晶機巧―ハリファイバー―》！」

2体のモンスターを素材に現れたのは、水晶なら装甲を持つ機械の戦士。

その効果は、次の仲間を呼び寄せる。

水晶機巧―ハリファイバー―

リンク2 水属性 機械族

攻撃力：1500

「《水晶機巧―ハリファイバー》の効果を発動！このカードのリンク召喚に成功時、手札かデッキからレベル3以下のチューナーモンスターを1体特殊召喚する！来い！《ガード・オブ・フレムベル》！」

ガード・オブ・フレムベル

レベル1 炎属性 ドラゴン族

守備力：2000

「《ガード・オブ・フレムベル》を素材にリンク召喚！召喚条件はレベル1のモンスター1体！現れる！《リンクリボー》！」

《ガード・オブ・フレムベル》がその炎を燃やし尽くして姿を変えると、そこには《リンクリボー》が現れた。

リンクリボー

リンク1 闇属性 サイバース族

攻撃力：300

「さあ、征くぞー！《水晶機巧―ハリファイバー》と《リンクリボー》を素材にリンク召喚！召喚条件は効果モンスターが2体以上！現れる、リンク3！《トポジック・トウリスバエナ》!!」

「《ガアアアアアツツ!!》」

続々と現れるモンスターたちから、まさにリンクする様に召喚された、電子世界の龍。

敵である五反田を見据えて咆哮を轟かせると、大気が震えて音が割れる。

トポジック・トウリスバエナ

リンク3 闇属性 サイバース族

攻撃力：2500

「最後に残っていた《異次元トレーナー》でリンク召喚！召喚条件はトークン以外のレベル1のモンスターが1体！リンク1！《サクリファイブ・アニマ》!!こいつを《トポジック・トウリスバエナ》の左下に召喚する！」

《異次元トレーナー》を素材にして現れたモンスターは、新たなサクリファイブという名を冠するモンスター。

彼も例に漏れず他のモンスターを吸収する効果を持っているが、今はそのために召喚されたわけではない。

サクリファイス・アニメ

リンク1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

「《トポロジック・トウリスバエナ》のリンク先にモンスターが特殊召喚された時、効果が発動される！今特殊召喚されたモンスターと、フィールドの魔法・罨カードを全て除外する！」

「は!?!除外!?!」

「そして除外されたお前のカードの数×500ポイントのダメージを与える！」

「バーン効果もあるのかよ!?!」

《トポロジック・トウリスバエナ》の効果により、焼き払われるフィールド。

そして除外される魔法・罨カードには、装備されているモンスターたちも含まれる。

「今は俺のフィールドにいるが、《ABCードドラゴン・バスター》もお前のカードだ！合計で5枚のお前のカードが除外され、2500ポイントのダメージを受けてもらう！」

「うわあああ!?!」

五反田 倫太

ライフポイント：4700↓2200

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：3000↓0

「そして《サクリファイス》から装備しているモンスターが失われた事で、再び吸収効果を使える！厄介なユニオンモンスターを奪わせてもらおうか！《Cークラッシュ・ワイバーン》を装備！」

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0↓1200

「まあ、ライフポイントにも心許ないし、《サクリファイス》は守備表示にする」

サクリファイス

レベル1 閥属性 魔法使い族

守備力：0↓2000

「どうせだから聞かぬが、さっきの伏せカードは何だったんだ？」

「《スクランブル・ユニオン》だったんだけど、除外されてるユニオンモンスターたちが足りなくて……」

「あー……。じゃあ、攻撃するか。《トポロジック・トウリスバエナ》で《ギアギガントX》^{クロス}を攻撃！」

《トポロジック・トウリスバエナ》の放つ攻撃により、爆散していく《ギアギガントX》^{クロス}。

これで五反田のフィールドはガラ空きだが、東雲はこのターンはもうこれ以上の攻撃はできない。

「ライフポイントは削り切れないな。ターンエンドだ」

五反田 倫太

ライフポイント：2200

手札：1枚（B―バスター・ドレイク）

フィールド：なし

東雲 圭史

ライフポイント：500

手札：0枚

フィールド：トポロジック・トウリスバエナ、サクリファイス、C
―クラッシュ・ワイバーン（サクリファイスに装備中）

「……お、オレのターン！ドロー!!」

ライフポイントの上では勝っているが、フィールドを見れば追い詰められているのは自分。

巻き返すために、気合を入れてドローをする五反田だが、果たして……。

「……モンスターを1体と、トラップカードを1枚セットして、ターンエンドするぜ……！」

「露骨過ぎるだろお前」

「リンちゃんー！ちよつと情け無いよ!!」

「やめろお!!」

結果はあまり良くなかったらしい。

普通ならはリバーズカードと宣言するところを、わざわざトラップカードと言い、しかも声が若干震えて目が泳いでいる五反田。

ブラフにしても酷過ぎる。

五反田 倫太

ライフポイント：2200

手札：0枚

フィールド：セットモンスター1体、伏せカード1枚

東雲 圭史

ライフポイント：500

手札：0

フィールド：トポロジック・トウリスバエナ、サクリファイス、C

ークラッシュ・ワイバーン（サクリファイスに装備中）

「俺のターン、ドロー。……あー、そうだな。とりあえず、今引いた《リチュアル・ウエポン》を《サクリファイス》に装備させて、攻撃表示に変更する」

「お、おう」

《サクリファイス》の異形の姿に合わせた状態で装備される、鎧と剣たち。

それに合わせ、守勢から攻勢へと体勢を変えると、その単眼がセットモンスター越しに五反田を見据える。

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：1200↓2700

空き缶ポップコーン

「リンちゃん……あんな情け無い負け方、中々ないよ?」

「なんで追い討ちをかけるんだカッチちゃん!」

罠カード宣言という残念過ぎる負け方をした五反田に、味方のはずなのに追い打ちをかける森山。

少年たちの残酷な友情を垣間見つつ、とりあえず東雲はデッキをシャッフルしている。

「じゃあ、次は勝蔵の番か」

「はいー!お願いしますー!」

お互いにデュエルディスクを構え、相対する。

「デュエル!!」

先行を示すターンランプは、東雲に灯された。

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

森山 勝蔵

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「俺の先行なんだが、正直言って先行って苦手なんだよな……。カード1枚分の差が地味にキツイし。まあ、どうにかするか。まずは魔法カード《儀式の下準備》を発動する。デッキから儀式魔法《合成魔術》と、それに名前が書かれている儀式モンスターの《ライカン・スロープ》を1枚ずつ手札に加える」

「あ、きつきのデュエルでも使ってたカード……!」

「言っておくが、切り札は《ライカン・スロープ》であって、《サクリファイイス》じゃないからな?それじゃあ続けて《マンジユ・ゴッド》を

通常召喚だ」

先陣を切るのは、万の手を持つ儀式召喚の良きパートナー。
その手がデツキへと延ばされると、次なるカードへとつなげられる。

マンジュ・ゴッド

レベル4 光属性 天使族

攻撃力：1400

「召喚された《マンジュ・ゴッド》の効果を発動！デツキから儀式モンスターか儀式魔法を1枚手札に加える！儀式魔法《高等儀式術》を手札に加えて、そのまま発動！デツキからレベル1の通常モンスター《プロトロン》3体と《異次元トレーナー》、《ガード・オブ・フレムベル》、《バニラ》を各1体ずつ生贄に捧げて、現れる！《ライカン・スロープ》！」

「アオオオオンツツ!!」

《ライカン・スロープ》が先ほどのデュエルからの再びの出番に、高らかに遠吠えを上げる。

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400

「カードを1枚セットして、ターンエンドだ」

東雲 圭史

ライフポイント：8000

手札：3枚（1枚は合成魔法）

フィールド：ライカン・スロープ、マンジュ・ゴッド、伏せカード
1枚

森山 勝蔵

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「ボクのターン、ドロロー！よし、まずは魔法カード《予想GUY^ガ》を発動！ボクのフィールドにモンスターがいないから、デッキからレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚する！《磁石の戦士^{マグネット・ウオリアールファ}α》を守備表示で特殊召喚！」

「^{マグネット・ウオリアールファ}磁石の戦士」か、随分と懐かしく感じるな」

森山の場で先陣を切るのは、全身が磁石で構築された戦士。

それを見た東雲が、懐かしい物を見たと思わず感慨にふける。

^{マグネット・ウオリアールファ}磁石の戦士 α

レベル4 地属性 岩石族

守備力：1700

「続いてボクは、^{エレクトロマグネット・ウオリアールファ}《電磁石の戦士 α》を通常召喚！」

「……そっちはイマイチ知らないカードだな。確か^{マグネット・ウオリアールファ}【磁石の戦士】が強化されたのは覚えてるんだが」

ポリポリと頭を掻きながら、磁石ではなく電磁石で構築された新たな戦士を見る東雲。

通常モンスターである^{マグネット・ウオリアールファ}《磁石の戦士 α》とは違い、電気の力を持つ

^{エレクトロマグネット・ウオリアールファ}《電磁石の戦士 α》には、新たな磁石の戦士を引き寄せる効果がある。

^{エレクトロマグネット・ウオリアールファ}電磁石の戦士 α

レベル3 地属性 岩石族

攻撃力：1700

「^{エレクトロマグネット・ウオリアールファ}《電磁石の戦士 α》が召喚された時の効果を発動！デッキからレベル8の磁石の戦士モンスターを1体手札に加える！手札に加えるのは、^{マグネット・ウオリアールファ}《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》！」

「おー、これまた懐かしいカード来たな」

森山の手札に加えられる^{マグネット・ウオリアールファ}《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》は、デュエルモンスターの初期から存在するカード。

少々難しい召喚方法が必要なカードだが、その攻撃力は大台の3000を超える3500という強力なモンスターだ。

「更に魔法カード《融合徴兵》を発動！エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せて、そこに書かれている素材モンスターを1体デッ

キから手札に加えるよ！その代わりに、手札に加えたモンスターとその同名モンスターは、そのターンは通常召喚も特殊召喚も、効果の発動もできないんだけどね」

「あ、それオレも入れれば良かったー！持ってないんだよなー」

「余ってるから今度交換しよーねー」

「イエーイ！」

ハイタッチして約束をする少年コンビ。

それを見ながら東雲は東雲で、明らかに自分にとって不利になっていく盤面を前に、こっそり背中に汗をかいている。

「それじゃあ、《超電導戦機インペリオン・マグナム》を見せて、《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》を手札に加えるね！そして《融合》を発動！手札の《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》と《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》で融合召喚！合体融合！《超電導戦機インペリオン・マグナム》の出撃だよ！」

上空で2体……いや、6体分の磁石パーツが組み合わさり、着地の衝撃と粉塵と共にそれは現れた。

《ライカン・スロープ》を大きく上回る巨躯。その全身から発せられる、強大な磁力。

磁石の戦士たちの究極合体の姿が、そこにあった。

超電導戦機インペリオン・マグナム

レベル10 地属性 岩石族

攻撃力：4000

「……はあ!? 攻撃力4000だと!？」

「攻撃力だけじゃないよ！1ターンに1度だけだけど、相手のモンスターや魔法カード、罫カードの発動を無効にして破壊する効果もあるんだー！」

「おいおい、勘弁しろよ……ッ！」

「続いて《磁石の戦士 α 》と《電磁石の戦士 α 》を素材に、リンク召喚！召喚条件は地属性モンスターが2体！リンク2！《ミセス・レディエント》の出撃！」

巨大な《超電導戦機インペリオン・マグナム》に対して、決してそ

こまで小さくはないがチョココン、と現れる《ミセス・レディエント》。磁石の戦士ではないが彼女もまた、《超電導戦機インペリオン・マグナム》をサポートする力を持っている。

ミセス・レディエント

リンク2 地属性 獣族

攻撃力：1400

「《ミセス・レディエント》がフィールドにいる間、全ての地属性モンスターは攻撃力と守備力が500ポイントアップするよ！」

「俺の《ライカン・スロープ》もパワーアップだな」

ミセス・レディエント

リンク2 地属性 獣族

攻撃力：1400↓1900

超電導戦機インペリオン・マグナム

レベル10 地属性 岩石族

攻撃力：4000↓4500

ライカン・スロープ

レベル6 地属性 獣戦士族

攻撃力：2400↓2900

「バトル行くね！まずは《ミセス・レディエント》で《マンジュ・ゴツド》を攻撃！」

「……ッ！（伏せカードは《威嚇する咆哮》……！発動しても《超電導戦機インペリオン・マグナム》で無効にされる……！）」

これが単純に伏せカードを破壊するだけのカードであれば、使われなくてもチェインして《威嚇する咆哮》を発動することもできたが、効果が無効にされると分かっていてはそれすらできない。

あえなく《ミセス・レディエント》の噛みつきにより、《マンジュ・ゴツド》が破壊される。

東雲 圭史

ライフポイント：8000↓7500

「続けて《超電導戦機インペリオン・マグナム》で《ライカン・スロープ》を攻撃！」

「クッ!!」

《超電導戦機インペリオン・マグナム》の大剣により、切り捨てられる
《ライカン・スロープ》。

その一振りの余波が東雲を襲い、ライフポイントを削っていく。

東雲 圭史

ライフポイント：7500↓5900

「カードを2枚セットして、ターンエンドするね!」

東雲 圭史

ライフポイント：5900

手札：3枚（1枚は合成魔術）

フィールド：伏せカード1枚（威嚇する咆哮）

森山 勝蔵

ライフポイント：8000

手札：0枚

フィールド：ミセス・レディエント、超電導戦機インペリオン・マグナム、伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー!……うーむ、《簡易融合》インスタント・フュージョンを発動!1000

0ライフポイントと引き換えに、エクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを特殊召喚する!現れる!《サウザンド・アイズ・サクリファイス》!!」

「そつちも入ってるの!?させない!《超電導戦機インペリオン・マグナム》の効果を発動!《簡易融合》インスタント・フュージョンの効果を無効にして、破壊するよ!」

ライフポイントというお湯が注がれ、カップ麺の内側から千の目を持つ魔法使いが現れようとするが、《超電導戦機インペリオン・マグナム》の発する強力な磁力により蓋を開ける事が出来ず、そのまま消滅してしまう。

東雲 圭史

ライフポイント：5900↓4900

「なら続いて、《儀式の準備》を発動する！デツキのレベル7以下の儀式モンスター《サクリファイス》と、墓地から儀式魔法《高等儀式術》を手札に加える！」

「さっきのリンちゃんとのデュエルでも使ってた、目玉のモンスター！」

「《高等儀式術》を発動！デツキから《バニーラ》1体を生贄に捧げ、《サクリファイス》を儀式召喚！」

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

「《サクリファイス》の効果を発動！《超電導戦機インペリオン・マグナム》を装備して、その攻撃力と守備力を得る！」

そのウジヤト眼に射抜かれ動けない《超電導戦機インペリオン・マグナム》を掴み、吸収する《サクリファイス》。

地属性ではないため《ミセス・レディエント》の効果の恩恵は受けないが、その必要もない程の力を得る。

サクリファイス

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0↓4000

「このままバトルフェイズに入るぞ！《サクリファイス》で《ミセス・レディエント》を攻撃！」

「うわっ!？」

森山 勝蔵

ライフポイント：8000↓5900

「み、《ミセス・レディエント》が戦闘・効果で破壊された時の効果を発動するよ！墓地から地属性モンスターを1体手札に加える！《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》を手札に加えるね！」

「なら、このターンはもうできることはないし、俺はこのままターンエンドだ」

東雲 圭史

ライフポイント：4900

手札：2枚（1枚は合成魔術）

フィールド：サクリファイイス、伏せカード1枚（威嚇する咆哮）

森山 勝蔵

ライフポイント：5900

手札：1枚（電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン）

フィールド：伏せカード2枚

「ボクのターン、ドロー！よし、どんどん行くね！リバースカード発動！《メタバース》！デッキからフィールド魔法を発動するよ！」

「げっ!?嫌な予感しかないな！」

「《マグネット・フィールド》を発動するよ！そして《磁石の戦士δ》マグネット・ウオリアーデルタを召喚！」

デルタの名前が示す通り、全身が三角で構成された磁石の戦士が現れると、そのまま森山のデッキへと磁力を発して効果を発動する。

磁石の戦士δ

レベル4 地属性 岩石族

攻撃力：1600

「《磁石の戦士δ》が召喚・特殊召喚された場合の効果が発動！デッキからレベル4以下のマグネット・ウオリアーモンスターを1体墓地へ送るよ！《磁石の戦士β》マグネット・ウオリアーベータを墓地へ！」

「嫌な予感が加速していくんだが!!」

「そして《マグネット・フィールド》の効果が発動！自分のフィールドにレベル4以下の地属性で岩石族のモンスターがいる時、1ターンに1度墓地のレベル4以下のマグネット・ウオリアーモンスターを特殊召喚できる！戻ってきて！《電磁石の戦士α》マグネット・ウオリアーデルタ！」

フィールド魔法と《磁石の戦士δ》の磁力が相互して高まり、墓地から《電磁石の戦士α》マグネット・ウオリアーデルタを引き摺り出す。

そして引き摺り出された《電磁石の戦士α》マグネット・ウオリアーデルタが、再びデッキへと磁力を発すれば……。

電磁石の戦士α

レベル3 地属性 岩石族

攻撃力：1700

「《電磁石の戦士α》が召喚された時の効果を発動！デッキからレベル8の磁石の戦士モンスターを1体手札に加える！手札に加えるのは、《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》！」

「さつきも見たぞその流れ！……ん？待てよ？確か《磁石の戦士δ》って、もう一つ効果あったよな？」

「その通りだよ！でも、まだ準備が必要かな！《磁石の戦士δ》と《電磁石の戦士α》で、リンク召喚！召喚条件は効果モンスターが2体！リンク召喚！《捕食植物ヴェルテ・アナコンダ》の出撃だよ！」

「融合召喚請負職人来やがった!!」

《ミス・レディエント》が先程までいたスペースに、代わりに現れたのは大蛇を模した食虫植物。

見た目も凶悪だが、何より恐ろしいのはその効果。

だが、まだその効果は使われない。

捕食植物ヴェルテ・アナコンダ

リンク2 闇属性 植物族

攻撃力：500

「続けて墓地へ送られた《磁石の戦士δ》の効果を発動！このカード以外の墓地のレベル4以下のマグネット・ウオリアーモンスターを3体ゲームから除外して、手札がデッキから《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》を召喚条件を無視して特殊召喚する！」

「はあ!?多少重いいえ、攻撃力3500がデッキから飛んでくるのか!?!」

「そうなんだよ！墓地の《電磁石の戦士α》、《磁石の戦士α》、《磁石の戦士β》をゲームから除外して、デッキから合体召喚！《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》出撃!!」

墓地の《磁石の戦士δ》がその身に秘めたもう一つの磁力の使い方を発揮すると、3体の磁石の戦士たちがその磁力に反応して合体を遂げる。

約1体程本来とは違うパーツの戦士が紛れ込んでいるが、最終的には何故かちゃんと正規通りの合体ができているから問題ないだろう。

磁石の戦士マグネット・バルキリオン

レベル8 地属性 岩石族

攻撃力：3500

「そして《捕食植物ヴェルテ・アナコンダ》^{プレデター・プランツ}の効果を発動！ライフポイントを2000支払い、デツキから融合かフュージョンと名のつく通常・速攻魔法を墓地に送る事で、その効果を代理して発動できる！」

森山 勝蔵

ライフポイント：3900

「デツキから《融合》を墓地に送って、手札の《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》と《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》を合体融合！」

「また来るのか!!」

「《超電導戦機インペリオン・マグナム》最終出撃!!」

《捕食植物ヴェルテ・アナコンダ》^{プレデター・プランツ}がライフポイントと《融合》をその顎に飲み込むと、それでもまだ足りないとはかりに手札の《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》と《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》までも飲み干す。

すると体の一部から花が咲き、枯れ、実がなり、その実から《超電導戦機インペリオン・マグナム》が誕生した。

超電導戦機インペリオン・マグナム

レベル10 地属性 岩石族

攻撃力：4000

「バトル！まずは《超電導戦機インペリオン・マグナム》で《サクリファイス》を攻撃！」

「チィー……クソー！自身の効果でモンスターを装備しているサクリファイスは、そのカードを代わりに破壊して自身は戦闘破壊を免れる！」

「同じ攻撃力同士だから、ボクの《超電導戦機インペリオン・マグナム》だけが戦闘破壊されるね」

《超電導戦機インペリオン・マグナム》の攻撃は、同じモンスターを装備している《サクリファイ》の反撃により破壊される。

だが、代わりに《サクリファイ》が装備していた《超電導戦機インペリオン・マグナム》も失われた。

しかし、それでも磁石の力は効果を発揮し続ける。

「だけど、今の戦闘で《サクリファイ》が破壊されなかったことで、《マグネット・フィールド》のもう一つの効果が発動されるよ！自分の地属性で岩石族モンスターとの戦闘で破壊されなかったモンスターを、持ち主の手札へ戻す！」

「なにい!？」

破壊された《超電導戦機インペリオン・マグナム》の持つ磁力と、《マグネット・フィールド》の磁力が相互に作用して増強され、《サクリファイ》を強制的に東雲の手札へと帰還させる。

これで東雲に残された盾は、最後の1枚のみ。

「……だが今なら使える！残りの攻撃宣言前に、罨カード《威嚇する咆哮》を発動！このターンお前は戦闘を宣言できなくなる！」
「え!？」

東雲の背後から出現した《暗黒のマンティコア》が咆哮を轟かせると、《捕食植物ヴェルテ・アナコンダ》も《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》も動きを止めてしまう。

《超電導戦機インペリオン・マグナム》がいたことで封じられていた罨カードが、ようやく生きた瞬間だった。

「なら……これでターンエンドだよ」

東雲 圭史

ライフポイント：4900

手札：3枚（2枚は合成魔術とサクリファイ）

フィールド：なし

森山 勝蔵

ライフポイント：3900

手札：なし

フィールド：捕食植物ヴェルテ・アナコンダ、磁石の戦士マグネット・バルキリオン、伏せカード1枚

「俺のターン、ドロ―！……ハッ、やっぱ毎回毎回、そう上手くはないか。モンスターを1体セットして、ターンエンドだ」

東雲 圭史

ライフポイント：4900

手札：3枚（2枚は合成魔術とサクリファイス）

フィールド：セットモンスター1体

森山 勝蔵

ライフポイント：3900

手札：なし

フィールド：捕食植物ヴェルテ・アナコンダ、磁石の戦士マグネット

ト・バルキリオン、伏せカード1枚

「ボクのターン、ドロ―！……《磁石の戦士γ》を通常召喚！そしてマグネット・ウオリアーガンマ《磁石の戦士γ》と《捕食植物ヴェルテ・アナコンダ》を素材にリンク召喚！召喚条件はモンスター2体以上！《電影の騎士ガイアセイバー》出撃だ！」

2体のモンスターが素材となり、現れたのは有名な《暗黒騎士ガイア》によく似た、機械の騎兵。

その槍はセットモンスター越しに、東雲を狙っている。

電影の騎士ガイアセイバー

リンク3 地属性 機械族

攻撃力：2600

「そしてバトルフェイズ！《電影の騎士ガイアセイバー》で、セットモンスターを攻撃！」

「こいつは《バニーラ》だ。守備力は2050だから、そのまま破壊されるな」

《電影の騎士ガイアセイバー》の槍が伏せられていた《バニーラ》を突

き刺し、爆散させる。

これで東雲を守るものは、何もなくなった。

「最後に、永続罫《化石岩の解放》を発動！除外されている自分の岩石族モンスター1体を特殊召喚する！戻ってきて！《磁石の戦士^{マグネット・ウオリアー}α》！！」

最後に現れたのは、最初に登場した磁石の戦士。

違うのは素材となる事ではなく、その剣を振るうべき時が来たという事。

磁石の戦士^{マグネット・ウオリアー}α

レベル4 地属性 岩石族

攻撃力：1400

「改めて、2体で攻撃!!」

「クツソ……オオオオオオオツツ!!?!」

東雲 圭史

ライフポイント：4900↓1400↓0

殺到する2体のモンスターの攻撃が東雲のライフポイントを削り取り、ピーーツ！というデュエル終了を知らせるブザーが無機質に鳴った。

「そんじゃあ、仕方ねえ。ちよつと待ってろ」

「やったー!!」

先程飲んだノンアルコールビール。使うのはその空き缶だ。

水中を洗ったら、軽く火にかけて中を乾かす。

そうしたら、空き缶にポップコーンの素を適量入れ、油を適量注ぐ。

それを火にかけて、ポンポンツ！と缶の中でポップコーンが爆ぜる音がし始める。

その音が止むまで待ち、止んだらすぐに火から缶を離し、缶切りで上部を開ける。

中身を皿にあげ、塩で味付けをすれば完成だ。

「そら、空き缶で作るポップコーンだ」

「すっげー！これ、缶でできるのか!？」

「フライパンとか、専用のセットとかでやるやつだよね!？」

「まあ、ポップコーンの素を火にかけるだけでできるからな。後は跳ねて跳ばないようにする、蓋になる物があれば良いからこんな空き缶でできちまうんだ」

子供たちに説明しつつ、早く食べるように促しながら自分は2本目の缶を取り出してプルタブを開ける。

キャツキヤとポップコーンを食べながらはしゃぐ子供たちを尻目に、揺れる焚火の火と山と沢の景色を眺めながら、ノンアルコールビールを喉に流し込んでいく。

つまみにするつもりで持って来たポップコーンはなくなってしまうが、それでもこの贅沢な時間が、何とも愛おしい。

「あー……美味え……」

そうして楽しみつつ、ふと、頭によぎる思考。

それをふと、口に出して誰とはなしに問いかける。

「……さて、今日の夕飯はどうすっかなあ……?？」

鮭とキノコのホイール焼き

東雲がソロキャンプでカルボナーラを食べている頃、押切は押切で土曜日の午前中を楽しんでいた。

「……ふはー！あー！朝から飲むビールが美味しい!!」

東雲に比べ、だいぶ不健全な形でだが。

朝食のベーコンエッグを着に、既に缶ビール（350ml）を3本空けている上に、手には半分飲んだ缶ビールがあるのが、更に不健全さに拍車をかけている。

テレビでは録画しておいたプロデュエリストの、次なる試合映像に変わっている。

「ふふふ……この後は圭史くんの作ったお昼を食べながら、〃二代目ゴブリンマスク〃『佐々木 龍馬』VS 〃サムライストーム〃『サイゾー・トローウン』戦を……!」

まるでプロレスを見るおじさんの様になりながら残りを飲み干し、5本目の缶ビールに手を伸ばそうとする押切。

が、その手が止まらなくてはいけない理由が、突如できてしまった。プルルルッ!

という着信音が、押切のデュエルディスクから鳴り出す。

もしや職場からの連絡か?という嫌な予感と共に、勇気を出して発信者を確認すると、そこに表示される名前に一息つく。

「やあ、真理亜。久しぶりだね?どうしたのかな?」

「お姉様、お久しぶりですわ」

通話の相手は、女子高時代の2年下の後輩だった『天乃宮^{あまのみや}真理亜』。

高校を卒業して8年は経つが、今でも交流のある可愛い後輩だ。

「突然なのですけれども、お渡ししたい物ができましたのでこの後お会いできますか?」

「あー……」

時間を確認すれば、現在11時。

周りを確認すれば、空き缶の数。

つまりは、今はやばい。

「……お昼ご飯食べてからにしようか!」

「では、そのようにお願ひしますね」

通話を切り、まずは残ったビールを飲み切る。

そのまま台所へ向かい水をがぶ飲みして、血中アルコール度数を下げながらブレスケアも飲む。

もってもらしい理由で時間は稼いだとはいえ、残された時間は少なく、無駄にはできない。

可愛い後輩を、幻滅させる事は彼女にはできないのだ。

ちなみに、東雲が用意しておいた昼食のサンドイッチは美味しく食べた。

「あ、お姉様!……っちです!」

約束の場所である駅前のカフェで落ち合うと、天乃宮が手を振って押切を呼ぶ。

その声に応じて、手を軽く振りながら近付いていくと、そこで気付いた。

一抱えくらいの妙に大きな、発泡スチロールがテーブルにある。

もしや渡したい物とは、その大きな発泡スチロールの中身なのか後輩よ。

「ま、真理亜。こんにちは、久しぶりだね。えっと……もしかしてそれが……?」

「はい、お姉様!今朝、父の知り合いの方から送られてきたのですけれど、実はもう一箱あります。それで一箱はお姉様にお裾分けを、と」

「中身は何かな?」

お洒落なカフェに不釣り合いな、明らかに生ものが入っていますという発泡スチロールを指さしながら訊ねる押切。

天乃宮は良いところのお嬢様だが、良いところの縁者とは時に珍味と称して突拍子もない物を贈ってきたりすることもあるので、確認しなくてはいけなかった。

これでもしもゲテモノであれば、確認せずに持ち帰ると東雲に怒られること間違いなし。

「鮭ですわ」

「よし！今すぐ圭史くんの家に戻ろう！」

「……あ、お姉様を作るわけではないんですね」

「料理は圭史くんの方が上手いからね」

「……あの、学生時代にイベントの時に配っていたクッキーは、実は東雲さんが作っていたとかそういうのはないですわよね……？」

「……………」

「黙られましたわ!？」

黙って目を逸らす押切を、こいつマジか!?という目で見つめる天乃宮。

「さて、お裾分けのお礼に（圭史くんが料理をして）ご馳走するけど、真理亜は鮭をどうやって食べたいかな？」

「露骨に話題を逸らされていますが、あえて乗るならわたくしはムニエルですわね」

「そうか。僕はホイル焼きかな」

「わたくしに聞いた意味は!？」

「一応聞いておかないと……」

おかしい。女子高時代にはこんなポンコツではなかったはずなのに。むしろ学園中の女子生徒たちが『私立八輝星女学園の王子様』と憧れ、お姉様と呼び慕っていたほどの完璧な才媛だったのに。

それがなぜこんなポンコツになったのだろうか。

そこそそ長い付き合いになる天乃宮だが、そんなことを考えながら首を捻るしかなかった。

天乃宮よ、だいたい東雲のせいだ。

「ふむ、よし。思い付いたよ真理亜。ここはメニューはデュエルで決めよう」

「お姉様とわたくしとでデュエルですか?良いですわよ?」

「いや、それも良いんだけど、実は僕は真理亜から電話が来た時に、プロデュエリストの試合の録面を見るところだったんだ。まだ見てな

いから、どっちが勝つか予想して、当てた方のメニューにしよう」
「なるほど。ちなみに、試合の組み合わせはなんでしよう？」

「〃二代目ゴ布林マスク〃 『佐々木 龍馬』VS 〃サムライストーム
〃 『サイゾー・トウウン』」

「……またなんとも予想のしづらい……………」

〃二代目ゴ布林マスク〃 こと『佐々木 龍馬』は、先代である
『坂巻 治五郎』から 〃ゴ布林マスク〃 の名前を数年前に受け継い
だプロデュエリスト。

その戦法は主にゴ布林と名の付いたカードを中心に、レベル4の
モンスターを特殊召喚して攻めていくのが特徴。

ちなみに、子供たち向けにデュエル教室も開いており、かなりの人
気を博している。

対して 〃サムライストーム〃 こと『サイゾー・トウウン』は、レベ
ル1のモンスターを多用したデッキを使用するのが特徴のデュエリ
スト。別に 〃サムライ〃 だからと和風系カードにはこだわらないど
ころか、全く関係のないカードを使っている。

ちなみに重度のラーメン狂信者であり、自身もラーメン屋を経営し
ており、試合のない日は店でラーメンを作っている。

そしてこの2人の実力だが、何度かプロリーグや交流戦などで戦っ
ているのだが、ほぼ五分と五分。

故に天乃宮は「なんとも予想のしづらい」と評したのだった。

「まあ、気楽に決めてよ」

「では…… 〃二代目ゴ布林マスク〃 にしますわ」

「分かった。それじゃあ、一緒に東雲くんの家で観ようか」

「家主の許可は…………？」

「後で一緒に怒られてね」

「お姉様アツ!？」

ドームに作られた試合会場。

スポットライトに照らされたそこは、今まさに2人のデュエリスト

を待っていた。

既に数試合が終わり、これから本日最後の試合となる。

実況者が高らかにリングコールを行い、彼らを呼び寄せるこの瞬間。会場のボルテージは最高潮に高まっていた。

「さーあ！プロ交流戦本日のスペシャルマッチの時間だあ！！それでは選手入場！まずは赤コーナー！御伽噺から現れる、恐るべき怪物たちの一角！今夜も我々に、その群れの力を見せてくれ！！『フオークロア・モンスターズ』所属！“二代目ゴ布林マスク”！ささきいいい……りよおおおまああつっ！！」

「オオオオオツツ！！」

「ゴゴゴゴブルーリン！！ゴブルーリン！！ゴブルーリン！！ゴブルーリン！！ゴブルーリン！！」

リングコールの直後にサポーターキッズたちと共に登場し、手足を打ち鳴らす戦意高揚の踊り『ハカ』を舞い観客を沸かせる“二代目ゴ布林マスク”こと『佐々木 龍馬』。

その名の通り緑色のモンスター、ゴブリンのマスクで顔の上半分を隠しているが、瞳はこれから対峙する相手が現れる通路の闇を見据えて燃えているのが、ハッキリと分かる。

「ッー」

不意に通路の奥から真っ直ぐに勢い付いて投げられた《突風の扇》を、バックラー型のデュエルディスクで弾く佐々木。

床に落ちたそれはソリッド・ヴィジョンだったのか、すぐに消滅してしまふ。

こんなものを投げ付ける男など、佐々木の対戦相手であるあの男しかない。

「これは挑戦的だ！青コーナー！刀をデツキに変え、海外で嵐の様に暴れ回ったこの男！遂に遂に付いた名前が“嵐サムライストームを呼ぶ侍”！今日も嵐を吹き荒らすのか！！『ハーベスト・スクワッド』所属！サイゾーオオオ……トーオオウウウンツツツ！！」

「ゴゴゴゴトウウン！！トウウン！！トウウン！！トウウン！！」

そのコールの直後、和装に身を包みポニーテールが特徴の男――

—『サイゾー・トールン』が、入場口から花道を駆け出し佐々木へと向かう。

その手には、《魂喰らいの魔刀》が握られており、それを認めた佐々木がデュエルディスクに魔法カードを叩き付ける。

そしてその手に現れるのは、《愚鈍の斧》。

トールンが接近した勢いそのままに回転するかの様に刀を振ると、それに佐々木が斧を叩き合わせて止める。

ガキインツ!!という金属同士がぶつかり合う音と共に、周囲に撒き散らされる衝撃波が観客席を襲うも、彼らは気にも留めない。

拮抗した鏢迫り合いの姿勢から、不意に刀が引かれ、力と勢いを殺せず振り下ろされて地面に突き刺さる斧を踏みつけ、更に深く埋めて使い物にならなくしてしまう。

そしてできた絶好の隙を、彼は逃さない。逆手に持ち替えた刀を一杯に引き、佐々木を突き刺そうとする。

だが、その一撃は果たせなくなる。使い物にならない斧から手を放した佐々木の、回し受けによって弾かれて遠くに転がっていったから。

この瞬間、攻守は逆転する。

片足で斧を踏み付けているという不安定な姿勢のトールンを、佐々木の拳による連撃が襲う。

左ジャブで顔面を狙って牽制し、腹部への右フックから踏み込み繋げてのエルボー。

トールンはその尽くを左ジャブは上体のスウエーで紙一重で躲し、右フックとエルボーはわざと後ろに倒れることで回避する。倒れた時には受け身を取り、衝撃を逃がしつとも次の動作に移っている。

だが、それでも戦いの最中において、相手より下の位置になるというのは大きな隙となる。

それを佐々木は確実に狙う。トールンが受け身を取った直後にジャンプし、その真上を位置取り体重を乗せた跳び足刀蹴りを叩き込む。

咄嗟に立ち上がるのをやめて横に転がり回避するトールンだが、着

地直後すぐに佐々木は次の攻撃へと移行している。

高く挙げられた左足。それがそのまま振り下ろされ、強烈な踵落としとなる。

この瞬間を、トールウンは待っていた。

地に付いている佐々木の右足を足趾で掴んで払い、その体を宙に浮かせる。

足で行う、変則的な投げ技。柔道の禁じ手である『山嵐』に構想を発した、現状トールウンしか使う者のいない技だ。

この隙にトールウンは立ち上がって距離を取り、佐々木は余裕をもって受け身を取ってから立ち上がる。

そして2人ともやや息を早くしながらも、スタツフからマイクを受け取る。

「やあやあ、久しぶりでござるな。ゴ布林マスク殿。息災だったでようでござるな?」

「ああ、こちらは問題ない。そちらも問題ないようだな」

「うむ、拙者も息災でござったよ。しかし良かった……これで体調不良を負けた時の理由にされずに済む」

「それはこちらの台詞だな」

対峙する2人が同様に浮かべる、凶暴な笑み。

そう。笑顔とは、古来より戦意を示す威嚇として使われる事もある。

「デュエル!!」

〃二代目ゴ布林マスク〃 佐々木 龍馬

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

〃サムライストーム〃 サイゾー・トールウン

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「こちらの先行！まずは《ゴブリンドバグ》を召喚！」

戦端を開くのは、飛行機に乗ったゴ布林。

だが、彼の飛行機に乗っているのは、1人だけではない。

ゴブリンドバグ

レベル4 地属性 戦士族

攻撃力：1400

「召喚した《ゴブリンドバグ》の効果が発動！手札からレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚し、その後このモンスターを守備表示にする！《ゴ布林エリート部隊》を特殊召喚！」

《ゴブリンドバグ》の飛行機から、お前らどこにそれだけ乗ってたの？とばかりに、ワラワラと結構な数の集団《ゴ布林エリート部隊》が降りて来る。

その間、《ゴブリンドバグ》は休憩に入った様子で、コクピットで寛いでいる。

ゴ布林エリート部隊

レベル4 地属性 獣戦士族

攻撃力：2200

ゴブリンドバグ

レベル4 地属性 戦士族

守備力：0

「レベル4のモンスター2体で、オーバーレイネットワークを構築！来い！ランク4！《キングレムリン》！」

2体のゴ布林モンスターたちが合わさり、現れるのは爬虫類の長。^{キング}

その能力は、後続となる爬虫類モンスターを呼び寄せる事。

キングレムリン

ランク4 地属性 爬虫類族

攻撃力：2300

「《キングレムリン》の効果が発動！エクシード素材を1つ取り除き、デッキから爬虫類族モンスター1体を手札に加える。こちらは《カゲ

トカゲ」を手札に加えよう」

「む、次のターンに繋げる手でござるな?」

「まあな。後は永続魔法《補給部隊》を発動。これでこちらのモンスターが戦闘か効果で破壊される度に、ドロワーできる。そしてカードを1枚セットしてターンエンドだ」

「二代目ゴ布林マスク」佐々木 龍馬

ライフポイント：8000

手札：2枚（1枚はカゲトカゲ）

フィールド：キングレムリン、補給部隊、伏せカード1枚

「サムライストーム」サイズー・トールン

ライフポイント：8000

手札：5枚

フィールド：なし

「拙者のターンでござるな。ドロワー……ふむふむ、それでは《アンノウン・シンクロン》の効果を発動。そちらのフィールドにのみモンスターがいる時、特殊召喚できるのでござるよ。まあ、このデュエル中に1度だけしかできぬがな」

フィールドにポツンと出現する、一つ目の球体型モンスター。

デュエル中に1度しか使えない効果とはいえ、極めて便利で有能な効果だ。

アンノウン・シンクロン

レベル1 闇属性 機械族

守備力：0

「続いて《パラサイト・フュージョナー》を召喚するでござる」

次いで現れたのは、奇妙な姿をした寄生虫。

この寄生虫には、ある強力な効果があるが今は使われない。

パラサイト・フュージョナー

レベル1 闇属性 昆虫族

攻撃力：0

「さあさあ、お立ち会い！まずはシンクロ召喚とさせてもらおう！レベル1の《パラサイト・フュージョナー》に、同じくレベル1の《アンノウン・シンクロン》をチューニング！現れよ！レベル2！《Aアサルトブラックフェザー》
B F ―雨隠れのサヨ》をシンクロ召喚でござる！」

トーンが手を大きく開いて仰々しく手振りをする、2つの星が合わさりフィールドに忍者のようなカラスが現れ、防御態勢をとる。

この防御能力が彼の持ち味だ。

アサルトブラックフェザー
A B F ―雨隠れのサヨ

レベル2 闇属性 鳥獣族

守備力：100

「守備力100程度のモンスターをわざわざ……？」

アサルトブラックフェザー

「おっと。先に伝えておくが、《A B F ―雨隠れのサヨ》は1ターンに2回までは戦闘では破壊されない効果を持つでござるよ。拙者はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

〃二代目ゴ布林マスク〃 佐々木 龍馬

ライフポイント：8000

手札：2枚（1枚はカゲトカゲ）

フィールド：キングレムリン、補給部隊、伏せカード1枚

〃サムライストーム〃 サイゾー・トーン

ライフポイント：8000

手札：2枚

アサルトブラックフェザー

フィールド：A B F ―雨隠れのサヨ、伏せカード2枚

「こちらのターン、ドロー……1ターンに2度までは戦闘破壊されないモンスターか。なら、まずは《キングレムリン》の効果を発動！デッキから爬虫類族モンスター《カメンレオン》を手札に加える！そしてそのまま召喚！」

佐々木のフィールドに現れるのは、まさしく仮面を被っているかのような姿のカメンレオン。

本来ならばエクストラデッキ以外からの特殊召喚を封じる代わり

に、墓地の守備力0のモンスターを特殊召喚する効果があるが、今回は使わない様子だ。

カメンレオン

レベル4 地属性 爬虫類族

攻撃力：1600

「更に手札の《カゲトカゲ》の効果を発動！レベル4のモンスターが召喚に成功した時、特殊召喚できる！」

そして先に現れた《カメンレオン》の影が揺めき、のっぺりと現れる《カゲトカゲ》。

どちらも真つ黒の、まさに影のトカゲといったところ。

カゲトカゲ

レベル4 闇属性 爬虫類族

攻撃力：1100

「さて、そのモンスター……1ターンに2回までは戦闘で破壊されない……だったか？」

「うむ、そうでござるよ。その3体のモンスターたちで攻撃するでござるか？」

「いや、戦闘破壊が手間なら、こちらはこうするまでだ。《カメンレオン》と《カゲトカゲ》でオーバレイネットワークを構築！来い！ランク4！《鳥銃士カステル》！」

《カメンレオン》の影と《カゲトカゲ》が溶け合い、地面に一塊の影を作る。

その影に《カメンレオン》が沈むと、入れ替わりにどろりと影をロブの様に纏いながら現れ、銃を構える《鳥銃士カステル》。

その瞳と銃口は既に、ターゲットを定めている。

鳥銃士カステル

ランク4 風属性 鳥獣

攻撃力：2000

「ツ！そやつの効果はマズイ！リバーズカードオープン！永続罫《リミット・リバーズ》を発動！墓地の攻撃力1000以下のモンスターを1体特殊召喚するでござる！」

だが、その銃口の先を失わせる力を持つのもまた、デュエリストだ。
「蘇れ！《パラサイト・フュージョナー》！」

墓地から蘇った《パラサイト・フュージョナー》だが、これで彼が力を発揮する条件は整った。

パラサイト・フュージョナー

レベル1 闇属性 昆虫族

攻撃力：0

「《パラサイト・フュージョナー》が特殊召喚に成功した時、効果を発動するでござる！このカードを融合素材の代理として、自分フィールドのモンスターと融合できる！効果モンスターの《A B F | 雨隠れのサヨ》と《サクリファイ》の代理として《パラサイト・フュージョナー》を融合する！現れよ！《ミレニウム・アイズ・サクリファイ》!!」

アサルトブラックフェザー

《A B F | 雨隠れのサヨ》に《パラサイト・フュージョナー》が

取り付き、侵食する。

そのまま宿主の体を作り替え、融合モンスターまったく別の存在にしてしまう。

それこそが、《パラサイト・フュージョナー》の真骨頂。

ミレニウム・アイズ・サクリファイ

レベル1 闇属性 魔法使い族

守備力：0

「《ミレニウム・アイズ・サクリファイ》は相手モンスターが効果を使った場合、相手モンスターを装備する効果を持つ。そして装備したモンスターの同名モンスターは戦闘も効果も使えなくなる。……《鳥銃士カステル》の効果は使わせないでござるよ」

「なら、シンプルに攻撃するだけだ。《鳥銃士カステル》で攻撃！」

「クッ!?破壊されるでござるよ……!」

《鳥銃士カステル》の銃撃が、《ミレニウム・アイズ・サクリファイ》の顔中央の大きな瞳を撃ち抜き貫く。

そのままポリゴンとなって、《ミレニウム・アイズ・サクリファイ》は消滅した。

これにより、トーンを守る存在はいなくなる。

「続けて《キングレムリン》でダイレクトアタックだ！」

「ぐううう……!!?!」

がら空きとなったトーンを、《キングレムリン》の爪による鋭い一撃が襲い、ライフポイントを削る。

“サムライストーム”サイゾー・トーン

ライフポイント：8000↓5700

「これでターンエンドだ」

“二代目ゴ布林マスク”佐々木 龍馬

ライフポイント：8000

手札：1枚

フィールド：キングレムリン、鳥銃士カステル、補給部隊、伏せカード1枚

“サムライストーム”サイゾー・トーン

ライフポイント：5700

手札：2枚

フィールド：リミット・リバーズ、伏せカード1枚

「手痛い初撃でござるな！然らば、ドロー！」

引いたそのカードを確認すると、口の端をギニツと歪めて、凶暴な笑顔を見せる。

「呵々ッ!!まずは手札の《ジェスター・コンフィ》の効果を発動！攻撃表示で特殊召喚するでござるよ！」

現れたのは、小柄で怪しげなピエロ。

自分フィールドに他の同名モンスターが存在できない制限はあるが、使い勝手は良い。

ジェスター・コンフィ

レベル1 闇属性 魔法使い族

攻撃力：0

「レベル1のモンスターが自分フィールドにいる時、魔法カード《ワンチャン!?》を発動する！デッキからレベル1のモンスターを手札に加

え、そのモンスターを召喚できなかったターンのエンドフェイズに、2000ダメージを受けるでござるよ。拙者は《金華猫》を手札に加え、そのまま通常召喚！」

ピエロの次に現れるのは、これまた怪しげな黒猫。

金華猫

レベル1 闇属性 獣族

攻撃力：400

「《金華猫》が召喚された時、墓地のレベル1のモンスターを特殊召喚するでござる！蘇れ！《アンノウン・シンクロン》！」

黒猫が一鳴きすると、その鳴き声に誘われて最初に登場した《アンノウン・シンクロン》が墓地から誘い出される。

アンノウン・シンクロン

レベル1 闇属性 機械族

守備力：0

「続いて、《アンノウン・シンクロン》と《ジェスター・コンフィ》でリンク召喚！召喚条件はチューナーを含むモンスター2体！現れよ！リンク2！《水晶機巧―ハリファイバー》！」

シンクロ召喚を支える機械の戦士が現れると、更にトーウンのデュエルは加速していく。

まるで、そう。ジェットで加速しているかのように。

クリストロン
水晶機巧―ハリファイバー

リンク2 水属性 機械族

攻撃力：1500

「《クリストロン水晶機巧―ハリファイバー》の効果を発動！デッキからレベル3以下のチューナーを1体特殊召喚するでござるよ。拙者はレベル1の《ジェット・シンクロン》を特殊召喚！」

ジェットエンジンのモンスターである《ジェット・シンクロン》が召喚されると、そのまま即座に星へと変わる。

ジェット・シンクロン

レベル1 炎属性 機械族

守備力：0

「そしてレベル1の《金華猫》にレベル1の《ジェット・シンクロン》をチューニング！シンクロ召喚！現れよ、レベル2！《フォーミュラ・シンクロン》！」

そして現れたのは、光速の世界へとデュエルを加速させるモンスター。

エンジンが唸りを上げて、そのやる気を示す。

フォーミュラ・シンクロン

レベル2 光属性 機械族

守備力：1500

「《フォーミュラ・シンクロン》がシンクロ召喚に成功した時、カードを1枚ドロウできる！そしてそれにチェーンして、シンクロ素材となった《ジェット・シンクロン》の効果を発動！デッキから『ジャンク』と名の付くモンスターを1体手札に加える！《ジャンクリボー》を手札に加え、そして1枚ドロウ！」

「手札が尽きないな……」

「そして今ドロウした魔法カード《増援》を発動するでござるよ。デッキからレベル4以下の戦士族モンスターである、《ビッグ・ワン・ウオリアー》を手札に加えるでござる」

「確かそのカードは、特殊召喚できたな？」

「その通りでござるよ。《ビッグ・ワン・ウオリアー》の効果を発動！手札のレベル1のモンスター1体を墓地へ送り、特殊召喚する！拙者は《ジャンクリボー》を墓地へ送り、こやつを特殊召喚するでござるよ！」

ビッグ・ワン・ウオリアー

レベル1 光属性 戦士族

攻撃力：1000

「そしてレベル1の《ビッグ・ワン・ウオリアー》に、レベル2の《フォーミュラ・シンクロン》をチューニング！シンクロ召喚！現れよ、レベル3！《霞鳥クラウソラス》！」

「そのカードは……ッ!?!」

暴風を纏って空から舞い降りる、《霞鳥クラウソラス》。

その羽ばたきは風と共に霞を作り、対象を惑わせる。

霞鳥クラウソラス

レベル3 風属性 鳥獣族

守備力：2300

「《霞鳥クラウソラス》の効果を発動！1ターンに1度ターン終了時まで、相手モンスター1体の攻撃力を0にして、更に効果も無効にする！拙者は《鳥銃士カステル》を対象とする！」

「《鳥銃士カステル》が……！」

《霞鳥クラウソラス》の作る霞に惑わされ、銃で狙うべき相手を見失ってしまった。

鳥銃士カステル

ランク4 風属性 鳥獣族

攻撃力：2000↓0

「それではバトルといくでござるよ。《水晶機巧―ハリファイバー》で《鳥銃士カステル》を攻撃！」

「多少の足掻きだけはさせてもらおうか！リバーズカード、オーブン！罠カード《スキルサクセサー》を発動！こちらのモンスター1体を対象とし、攻撃力を400ポイントアップする！《鳥銃士カステル》の攻撃力を400に！」

鳥銃士カステル

ランク4 風属性 鳥獣族

攻撃力：0↓400

「《スキルサクセサー》は墓地でも効果を発揮するカード……。ダメーシ削減ついでに、墓地へ送っておく腹積もりでござるか！だが、これで《鳥銃士カステル》は破壊でござる！」

「甘んじて受けよう。しかし、《鳥銃士カステル》が破壊された事で、《補給部隊》の効果で1枚ドローする」

“二代目ゴブリンマスク” 佐々木 龍馬

ライフポイント：8000↓6900

「さて、拙者はこれでターンエンドとさせてもらおうか」

〃二代目ゴブリンマスク〃 佐々木 龍馬

ライフポイント：6900

手札：2枚

フィールド：キングレムリン、補給部隊

〃サムライストーム〃 サイゾー・トールン

ライフポイント：5700

手札：1枚

フィールド：水晶機巧クリストロン―ハリファイバー、霞鳥クラウソラス、リミツ

ト・リバーズ、伏せカード1枚

「《鳥銃士カステル》が倒されたのは、些か手痛いが……こちらはゴブリンらしく攻めるだけだ。ドロ―！」

これで3枚になった手札。

ここで打つべき手は。そう考えた瞬間、先に動いたのはトールンだった。

「スタンバイフェイズに発動！ 永続罠《リビングデッドの呼び声》！ 自分の墓地からモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！ 墓地より

蘇れ！ 《A B F ―雨隠れのサヨ》！

「クツ!? もう揃えてくるか!!」

墓地から蘇るのは、先ほどよりも忍び装束がボロボロになり、どこかアンデッド族じみた 《A B F ―雨隠れのサヨ》。

別に種族は変わっていないので、安心してほしい。

A B F ―雨隠れのサヨ

レベル2 闇属性 鳥獣族

攻撃力：800

「こちらはそのままメインフェイズに入ろう。……こちらには止める手立てはない。《水晶機巧―ハリファイバー》の効果を使うと良い」
「では遠慮なく、《水晶機巧―ハリファイバー》の効果を発動！ 相手のメインフェイズかバトルフェイズにこのカードを除外し、シンクロモンスターのチューナー1体をシンクロ召喚扱いで特殊召喚するでござる！ 現れよ！ 《シユーンティンク・ライザー・ドラゴン》!!」

《水晶機巧―ハリファイバー》が突如輝くと、7個の星と輪に変化。

その輪を星が潜り抜けると、新たに輝く星の龍となる。

シューティング・ライザー・ドラゴン

レベル7 光属性 ドラゴン族

攻撃力：2100

「来るか……。『サムライストーム』の切り札……!」

「拙者の切り札を見せてやろう。《シューティング・ライザー・ドラゴン》の効果を発動!」

その瞬間、《シューティング・ライザー・ドラゴン》の姿が掻き消えてしまう。

否、掻き消えたのではない。

ただ、見えなくなる程の速度に加速しただけのこと。

そしてこの加速は、切り札の召喚への準備。

「相手のメインフェイズに、このカードを素材としてシンクロ召喚ができる! 拙者はレベル2の《Aアサルトブラックフェザー B F

―雨隠れのサヨ》とレベル3の《霞鳥クラウソラス》に、レベル7の《シューティング・ライザー・ドラゴン》をチューニング! 銀河を吹き荒れる嵐となれ! シンクロ召喚!! 現れよ!!」

3体のモンスターが集い、星々の集まりである銀河を形成。そしてそこに吹く爆裂的な風の龍となる。

「レベル12! 《コスミック・ブレイザー・ドラゴン》!!」

「そいつをリリースし、《海亀壊獣ガメシエル》をそちらのフィールドに特殊召喚する」

「貴様アアアツツ!!!」

が、登場直後に龍は消滅し、代わりに《海亀壊獣ガメシエル》が現れる。

強力な効果無効能力を持つ《コスミック・ブレイザー・ドラゴン》だが、召喚コストにリリースをされては効果を使う事などできない。

ノリノリで切り札を出してみれば、中々に手酷い仕打ちに悲しむトウン。

これもまたデュエルだ。

海亀壊獣ガメシエル

レベル8 水属性 水族

攻撃力：2200

「続いて《ゴブリン突撃部隊》を召喚しよう」

《海亀壊獣ガメシエル》に対峙するように現れたのは、これぞゴブリンとばかりの荒くれ部隊。

だが、その荒くれ部隊の攻撃力は、デメリットこそあれども同レベル帯ではトップクラスであり、攻撃力2200のモンスターを倒すのに必要な数値を持っている。

ゴブリン突撃部隊

レベル4 地属性 戦士族

攻撃力：2300

「さて、バトルフェイズだ。《ゴブリン突撃部隊》で《海亀壊獣ガメシエル》を攻撃！」

「グッ!？」

“サムライストーム”サイゾー・トーン

ライフポイント：5700↓5600

「攻撃後、《ゴブリン突撃部隊》は守備表示に変更される」

ゴブリン突撃部隊

レベル4 地属性 戦士族

守備力：0

「加えて《キングレムリン》でダイレクトアタックだ！」

「それはさせせん！手札より《アンクリボー》の効果を発動！このカードを手札から捨て、墓地のモンスターをこのターン限りで蘇生させる！蘇れ、《コズミック・ブレイザー・ドラゴン》!!」

「オオオオオオオオオツツ!!!」

《アンクリボー》が墓地へ行くが、その額のエジプト十字架が墓地で輝くと、先ほど即座に退場させられた《コズミック・ブレイザー・ドラゴン》が雄叫びを上げて蘇り、トーンを守るべく《キングレムリン》の前に立ちはだかる。

コズミック・ブレイザー・ドラゴン

レベル12 風属性 ドラゴン族

攻撃力：4000

「チツ！ならば攻撃は中止だ！カードを1枚セットして、ターンエンド！」

「では、ターン終了時に《ゴズミック・ブレイザー・ドラゴン》は墓地へ送られるでござるよ」

〃二代目ゴ布林マスク〃 佐々木 龍馬

ライフポイント：6900

手札：なし

フィールド：キングレムリン、ゴ布林突撃部隊、補給部隊、伏せカード1枚

〃サムライストーム〃 サイゾー・トウウン

ライフポイント：5600

手札：なし

フィールド：リミット・リバーズ、リビングデッドの呼び声

「拙者のターン、ドロ！……よし！良いタイミングでござるな！《マジック・プランター》を発動！拙者の表側表示の永続罫カードを1枚墓地へ送り、2枚ドロ！できる！拙者は《リビングデッドの呼び声》を墓地へ送り、2枚ドロ！」

「また良いタイミングでこのラーメン侍は……！」

「さて、これで……！ふむ、悪くはないが……いや、やるしかなかろう！《金華猫》を召喚！」

2度目の登場となる、墓地より仲間を呼び戻す黒猫。

そして再び、その鳴き声が墓地へと響く。

金華猫

レベル1 闇属性 獣族

攻撃力：400

「効果は先程説明した通り。拙者は《金華猫》の効果で、《パラサイト・フュージョナー》を特殊召喚！」

《金華猫》の鳴き声に応じて出てきたのは、融合を支える寄生虫《パラサイト・フュージオナー》。

その6本の足がカサカサと動き、そして《金華猫》を捉える。

パラサイト・フュージオナー

レベル1 闇属性 昆虫族

攻撃力：0

「《パラサイト・フュージオナー》が特殊召喚された瞬間、効果を発動！とあるモンスターの代理として《パラサイト・フュージオナー》と《金華猫》で融合召喚！」

融合のためにモンスターを混ぜ合わせる渦が発現し、そこに2体のモンスターが混ぜられる。

そしてその渦の先から聞こえるのは、カチコチという時計の針が刻まれる音。

「現れよ！《時の魔導士》！」

時の魔導士

レベル5 光属性 魔法使い族

攻撃力：2000

「《時の魔導士》の効果を発動！フィールドのモンスター全てを破壊し、その攻撃力の合計の半分を我々のどちらかがダメージとして受けろ！さて、本来ならばコイントスで決めるが、折角だ。ここは拙者らしく、丁半で決めるとしよう。拙者は丁を選ぶでござるよ！」

「賽の目は……」

コインの代わりに現れたサイコロが2個振られ、出た目は――

「2・6の丁！お主がダメージを受けるでござる！」

「運の良い侍が……!!」

――トーンへ利となる丁を示した。

《時の魔導士》の操る時間の力がフィールドを襲い、全てのモンスターたちを破壊しつつその余波が佐々木を襲う。

与えられるダメージは、3300とかなりのもの。

“二代目ゴブリンマスク” 佐々木 龍馬

ライフポイント：6900↓3600

「だがこちらのモンスターが破壊された事で、《補給部隊》の効果で1枚ドロ―する!」

「もうお主に次のターンは来ないから無用よ!手札に残された《カクリヨノチザクラ》の効果を発動!拙者とお主の墓地に存在する魔法カードか罠カードを1枚ずつ除外し、特殊召喚する!拙者の墓地の《マジック・プランター》とお主の墓地の《スキルサクセサー》を除外し、現れよ!《カクリヨノチザクラ》!」

「そのカードは……!!?」

墓地の魔法・罠を生贄にしたのは、可憐な少女のようなモンスター。

だが、その手には死神の持つ様な鎌が握られている。

そして死神とは、時に死者の魂を蘇らせる事もある。

カクリヨノチザクラ

レベル1 闇属性 悪魔族

守備力:0

「《カクリヨノチザクラ》の効果が発動!このカードをリリースして、拙者かお主の墓地から融合、シンクロ、エクシーズ、リンクモンスターのいずれか1体を除外し、そのモンスターとは種類の異なるモンスターを墓地から特殊召喚する!お主の墓地の《鳥銃士カステル》を除外し――!」

「(こちらのリバースカードは……《マジカルシルクハット》……。防げない……か……)」

「――三度現れよ!《コズミック・ブレイザー・ドラゴン》!!」

これで最後とばかりに、その巨翼を目一杯に羽ばたかせ、フィールドに嵐を巻き起こす《コズミック・ブレイザー・ドラゴン》。

その口内にはいつでも放てるとばかりに、エネルギーが溜められていく。

コズミック・ブレイザー・ドラゴン

レベル12 風属性 ドラゴン族

攻撃力:4000

「バトルフェイズだ!《コズミック・ブレイザー・ドラゴン》で、ダイレクトアタック!!」

「……次は負けんぞ、サイゾーオオオオツツ!!!」

“二代目ゴ布林マスク” 佐々木 龍馬

ライフポイント：3600↓0

「……まさかレベル1のモンスターだけで、あそこまで展開するなんて……」

試合映像を見終わった天乃宮の呟きは、プロという存在に対しての畏敬がこもっている。

「それが『サムライストーム』の所以だよ。ただ、今回のデュエルでは『二代目ゴ布林マスク』が負けただけど、仮に彼が先に切り札を出していれば、決着は変わったかもね」

「なるほど……。そういえばお姉様。1つ……。いえ、2つほど気になったのですが……」

「おや、何かな？ 『二代目ゴ布林マスク』の先代は、『キングゴ布林』を切り札とした悪魔族デツキだよ」

「あ、いえ。それは気になったことではなく、サイゾーさんと東雲さんがどこか似ているというか……。面影があるというか……」

「ああ、兄弟だよ。サイゾーさんの本名は『東雲 しののめ 歳三』で、圭史くんのお兄さん。『サイゾー・トウン』は海外修業時代に向けた向こうでのあだ名で、こつちでプロになった時にリングネームにしたらしいよ」

「まさかとは思いましたが……。どうりでですわね」

ちなみにだが、ごさる口調はキャラ付のためだったのだが、やり過ぎて現在はプライベートでも完全にごさる口調になっているのと。

「それで、もう1つの気になったことは？」

「試合前の格闘戦はなんだったんですの？」

「試合前に会場を盛り上げるために、たまにやるんだよ。サイゾーさんはサンボと剣術ができるし、ゴブマスさんは空手ができるんだって」

「ああ、なるほど」

「前は打ち合わせをみつちりしてからやってたらしいけど、何度もやったから最近じゃお互いを信用しすぎて打ち合わせなしのぶっつけ本番らしいよ」

「事故が起きてもおかしくないですよ!?!」

※鍛えられて、何度も手を合わせた格闘家・デュエリストだから事故が起きていないだけです。真似してはいけません。

「まあ、これで僕の選んだメニューが夕飯だね」

「うう……デュエルの結果ですもの。否はないですわ」

「じゃあ、圭史くんが帰るのを待とうか」

「そうですね。……いや、ご自分で作って待っててあげるとか、そういうのはないんですの……?」

「圭史くんの作るご飯、美味しいんだよね」

「あ、ないんですのね」

こうして本日の夕飯は、鮭のホイル焼きに決まった。

なお、ソロキャンプから帰宅した東雲が急に決まった鮭のホイル焼きに、「俺はちゃんちゃん焼きにしたい」と言ったが、デュエルで決まった事だからと押し切られた。

東雲は怒って良い。

とはいえ、メニューが決まれば作るだけ。

エプロンを身につけ、キッチンに立つ。

まずは下拵えとして、鮭の切り身には塩を軽く振って10分ほど置く。この時切り身から水分が出るが、出た水分はキッチンペーパーなどで拭しておく。こうする事で、生臭さが緩和できる。

アルミホイルの上にシメジやエノキ、舞茸を乗せ、さらにそこに鮭の切り身を乗せていく。

顆粒コンソメを適量振り掛け、塩胡椒を少々。

バターを一欠片乗せたらアルミホイルを閉じ、フライパンに入れて弱火でじっくりと蒸し焼きにする。

これで完成だ。

「ほら、できたぞお前ら」

「きたきた！」

「すいません、ありがとうございます。お皿洗いはさせていただきます」
「客なんだ、構わねえよ。……ただ、その気持ちをそいつに分けてくれ」

「う、うふふ……」

疲れた眼差しで押切を見ながら言う東雲に、曖昧な笑顔で答える天乃宮。

相手は（一応は）尊敬し、敬愛する先輩なので気を遣わなくてはいけない、悲しい後輩がそこにいた。

「まあ、いいか……。そら、食うぞ」

「いただきます」

アルミホイルの包みを開けば、ふわりと立ち上がる湯気とバターの香り。

それにコンソメと鮭の香りも混ざり、食欲をそそる。

「塩気が足りなかったら、醤油を少し垂らしとけ」

言いつつ、箸で身をほぐせば柔らかくふつくらとしている。

一口食べれば、鮭の脂と身の旨みが溢れ出る。そこに、バターのコクだ。

「我ながら美味えな」

「ホントだね、圭史くん」

「この下にあるキノコたちも、しっかり出汁を吸って美味しいですわ」
暖かく、美味しい鮭でご飯とビールが進む。

2人だけの金曜日の夕飯も美味しいけれど、今日は友人も交えた土曜日のまた少し特別な夕飯。